南島原市文化財調査報告書　第13集

# 宮 野 遺 跡

― 大苑地区県営畑地帯総合整備事業（担い手育成型）に伴う発掘調査 ―

２０１８

長崎県南島原市教育委員会

南島原市文化財調査報告書　第13集

# 宮 野 遺 跡

― 大苑地区県営畑地帯総合整備事業（担い手育成型）に伴う発掘調査 ―

２０１８

長崎県南島原市教育委員会

# 発刊にあたって

本書は，南島原市有家町大苑地区の県営畑地帯総合整備事業（担い手育成型）に伴い，発掘調査を実施した宮野遺跡の調査報告書です。

宮野遺跡は事業に伴う試掘調査で新たに発見された遺跡で，縄文時代，弥生時代，古墳時代，古代，中世，近世の複合遺跡であることがわかりました。本調査は事業の都合上，工事と並行して調査をおこない，多くのピットや溝が確認されました。

基幹産業である農業の振興のため，基盤整備は必要な事業であり，事業推進と埋蔵文化財の適切な保護のための調整は重要なものです。現地に残して保護する遺跡，形を変えて記録として残す遺跡があります。

国民共有の財産である文化財を保護し，伝えていくことは我々の責務です。本書が郷土の歴史教育，研究のために広く活用されることを願います。

最後になりましたが，大苑地区埋蔵文化財発掘調査事業について格別のご理解とご協力賜りました関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成30年９月30日

南島原市教育委員会

教育長　永田　良二

# 例　　言

1　本書は，宮野遺跡（長崎県南島原市有家町大苑字宮野所在）の発掘調査報告書である。

2　調査は，長崎県が事業主体である大苑地区県営畑地帯総合整備事業（担い手育成型）に伴って実施した。

3　現地調査は，有家町教育委員会（現南島原市教育委員会）が主体となって実施した。また，本書作成に係わる整理調査は，長崎県南島原市教育委員会が主体となって実施した。整理調査の体制・担当は，以下のとおりである。

整理調査

調査主体

| | | | |
|---|---|---|---|
| 南島原市教育委員会 | 教　育　長 | | 永田　良二 |
| | 教 育 次 長 | | 深松　良蔵 |
| | 文化財課長 | | 松本　慎二 |
| | 文化財課文化財班 | 班長 | 末永　　透 |

調査担当

| | | | |
|---|---|---|---|
| 南島原市教育委員会 | 文化財課文化財班 | 副参事（学芸員） | 荒木　伸也 |
| | | 副参事（学芸員） | 本多　和典 |

4　現地調査における写真撮影は，荒木が行った。遺構配置図および土層実測図の作成は，㈱埋蔵文化財サポートシステム長崎支店に委託した。また，航空写真の撮影は，㈲スカイサーベイ九州に委託した。

5　遺物の洗浄・注記などの基礎整理は，佐藤弘美，照平八千代，松尾恵美子が行った。遺物の実測は，壹岐美由紀，高木加奈代，湯田由美，本多が行い，一部を㈱埋蔵文化財サポートシステム長崎支店に委託した。拓本は，岩田貴子が行った。製図は，湯田が行った。遺物の写真撮影は，本多が行った。

6　本書に関する遺物，図面，写真等は，南島原市深江埋蔵文化財整理室において保管している。

7　本書の執筆は，荒木・本多で分担し，目次に担当者を記した。編集は，本多による。

# 本 文 目 次

第Ⅰ章　位置と環境（荒木）……1
　第１節　地理的環境……1
　第２節　歴史的環境……1

第Ⅱ章　調査の概要（荒木）……4
　第１節　調査に至る経緯……4
　第２節　調査組織等……4
　第３節　調査区の設定と調査の方法……4

第Ⅲ章　調査成果……7
　第１節　土層（荒木）……7
　第２節　遺構（荒木）……7
　第３節　溝内出土の遺物（荒木）……7
　第４節　包含層ほか出土の遺物（本多）……11
　　⑴　土器・陶磁器類……11
　　⑵　石器……24
　第５節　まとめ（荒木）……33

# 挿図目次


第１図　有家町内遺跡地図……３
第２図　調査区位置図……５
第３図　区画割付図……６
第４図　土層図……８
第５図　遺構実測図……９
第６図　溝内出土の遺物……10
第７図　縄文時代早期の土器……11
第８図　縄文時代後期～突帯文期の土器①…12
第９図　縄文時代後期～突帯文期の土器②…13
第10図　縄文時代後期～突帯文期の土器③…14
第11図　縄文時代後期～突帯文期の土器④…15
第12図　弥生時代中・後期の土器①……17
第13図　弥生時代中・後期の土器②……18
第14図　弥生時代中・後期の土器③……19
第15図　古墳時代・古代の土器，
中・近世の土器・陶磁器類……20
第16図　出土石器①……24
第17図　出土石器②……25
第18図　出土石器③……26
第19図　出土石器④……27
第20図　出土石器⑤……29
第21図　出土石器⑥……30
第22図　出土石器⑦……31


# 表　目　次


第１表　溝内出土の遺物観察表……10
第２表　包含層ほか出土の遺物
（土器・陶磁器類）観察表①　……21
第３表　包含層ほか出土の遺物
（土器・陶磁器類）観察表②　……22
第４表　包含層ほか出土の遺物
（土器・陶磁器類）観察表③　……23
第５表　包含層ほか出土の遺物（石器）観察表
……32


# 図版目次


図版１　航空写真①……37
図版２　航空写真②……38
図版３　航空写真③……39
図版４　調査風景・土層……40
図版５　調査風景・溝……41
図版６　遺物出土状況……42
図版７　溝内出土の遺物……43
包含層ほか出土の遺物（土器）①…43
図版８　包含層ほか出土の遺物（土器）②…44
図版９　包含層ほか出土の遺物（土器）③…45
図版10　包含層ほか出土の遺物（土器）④…46
図版11　包含層ほか出土の遺物（土器）⑤…47
図版12　包含層ほか出土の遺物（土器）⑥…48
図版13　包含層ほか出土の遺物（土器）⑦…49
図版14　包含層ほか出土の遺物
（土器・陶磁器類）　……50
図版15　包含層ほか出土の遺物（石器）①…51
図版16　包含層ほか出土の遺物（石器）②…52
図版17　包含層ほか出土の遺物（石器）③…53
図版18　包含層ほか出土の遺物（石器）④…54

# 第Ⅰ章　位置と環境

## 第１節　地理的環境

島原半島の南東部に位置する南島原市は，平成18年３月31日に南高来郡深江町，布津町，有家町，西有家町，北有馬町，南有馬町，口之津町，加津佐町の８町が合併し誕生した。北は島原市，西は雲仙市と接し，南東は有明海に面している。面積は170.11㎢，平成30年８月末の人口は46,292人である。

半島の中央部には，普賢岳（1,359m)，国見岳（1,347m)，妙見岳（1,333m)などの雲仙山系が連なり，平成の普賢岳の噴火活動で山頂部に溶岩ドームが形成され，平成新山（1,483m)として長崎県の最高峰となっている。北部の深江町から西有家町までは扇状地，緩やかな丘陵が多いが，北有馬町から南部の加津佐町までは山間部が多く，海岸線まで急峻な地形が迫っているところが多い。

宮野遺跡は南島原市有家町大苑名字宮野に位置する。雲仙山系を中心に有明海に向かって延びる丘陵や台地と，これらを浸食するいくつもの河川があり，この中の標高約30～40m の丘陵上に立地している。

## 第２節　歴史的環境

南島原市内では現在190の遺跡が存在し，有家町内には56の遺跡（うち９遺跡はキリシタン墓碑群などの石造物）がある。縄文時代の遺跡が多く見られるが，実際に調査された遺跡が少ないため，詳細な内容等は分かっていない。以下，有家町内の遺跡について時代ごとに述べていく。

旧石器時代を主体とする遺跡の発掘調査事例は市内ではなく，現地踏査での表採や他の時代の調査で遺物包含層に混在して遺物が確認された事例がある。町内では長崎県教育庁文化課（以下，県文化課）が実施した農免農道建設に伴う下木場遺跡（後に通野遺跡と名称変更）発掘調査で，三稜尖頭器が出土しており，土地利用が旧石器時代には始まっていたと想定されている。

縄文時代では晩期を主体とする遺跡が多い。主な遺跡としては，西鬼塚支石墓・石棺群，堂崎遺跡，蒲河遺跡があげられ，いずれも県文化課が調査を実施している。西鬼塚支石墓・石棺群の範囲確認調査では，支石墓と箱式石棺が確認され，一部はマリンパークありえ内に移設復元されている。港湾関係事業で調査を実施した堂崎遺跡，蒲河遺跡では，晩期土器のほか，多量の礫器，石錘が出土している。有明海沿いの海中干潟に見られる潮間帯遺跡で，尖頭状礫器，双角状礫器が多く出土しており，貝類の採取，加工を主とした活動の場と考えられている。堂崎遺跡調査時に遺跡西側の海岸においても同様な礫器を多数確認し，石田遺跡としている。前述の通野遺跡では早期の押型文土器，晩期土器が出土しており，近年，市道改良工事に伴い南島原市教育委員会文化財課が調査した東大窪遺跡では，縄文時代早期，後・晩期の土器や，台石，叩石，磨製石斧，玉などが出土し，後・晩期と考えられる廃棄土坑を確認している。

弥生時代の遺跡として堤遺跡，貝森遺跡があげられる。『有家町郷土誌』によると有家川下流域にある堤遺跡で中・後期の合口甕棺や貝製の装飾品が出土し，その他に海中干潟の貝森遺跡では後期土器が出土したほか，縄文時代の前期，中期，晩期土器や双角状礫器も出土したとある。いずれにしても昭和30年代の工事中に出土したとの記録や表採資料によるものが多く，調査が実施されていないため詳細は不明である。平成14年に海岸整備事業に伴い県文化課が貝森遺跡の範囲確認調査を実施して

おり，摩耗した土器が出土しているが，貝森川の河口にあり流れ込みと考えられている。

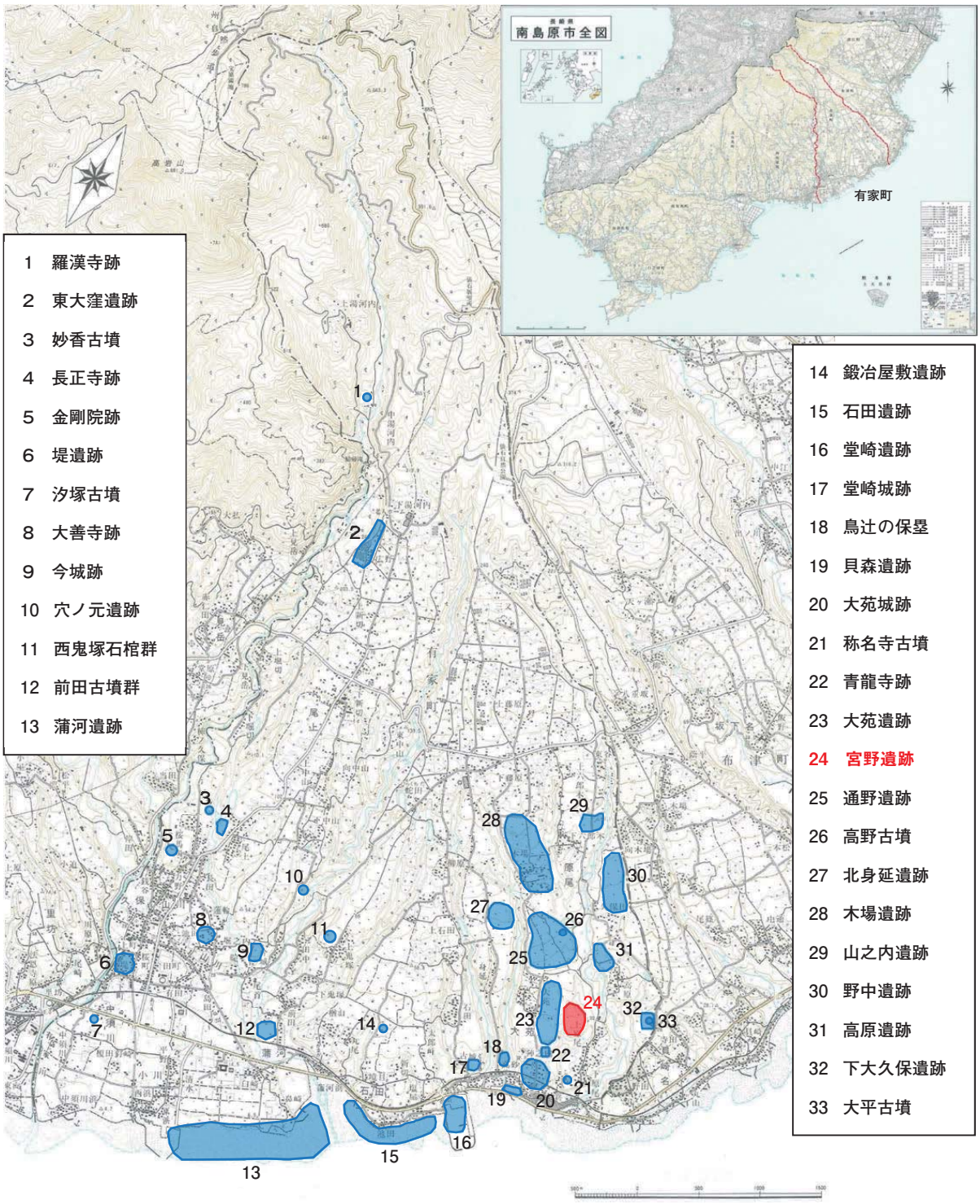
古墳時代の遺跡として高野古墳，大平古墳，妙香古墳，称名寺古墳，前田古墳群，汐塚古墳の６つの古墳が遺跡地図に掲載されている。『有家町内における文化財の分布調査』によると，高野古墳は昭和30年代に九州大学が調査し，土師器，須恵器，鉄鏃，ガラス玉が出土したとある。昭和50年代には有家町史跡調査委員会が大平古墳，妙香古墳の調査を行い，大平古墳では須恵器片を表採している。妙香古墳では遺物を確認していない。前述の３つの古墳は，調査着手時には既に半壊しており，盗掘されていたとのことである。称名寺古墳では金環が出土したとされるが，その他の古墳について詳細は不明である。

明確な古代の遺跡は確認されていない。中世では古記録に残る寺院跡として，羅漢寺跡，青龍寺跡，長正寺跡，金剛院跡，大善寺跡がある。平成16年に有家町教育委員会（以下，町教委）が羅漢と呼ばれる石像が祀られている周辺を中心に羅漢寺跡の内容確認調査を実施しているが，遺構，遺物は確認できなかった。城館跡として堂崎城跡，大苑城跡，今城跡，鳥辻の保塁があり，昭和50年代に町教委が堂崎城跡の発掘調査を実施し輸入陶磁器類が出土したとされるが，遺物の所在等は不明である。

近世ではキリシタン墓碑が42基確認されている。明治35年に郷土史家の森豊造氏が発見した花十字紋の中須川キリシタン墓碑は，長崎県下キリシタン墓碑発見の端緒となった。

**【参考文献】**

吉永重人・篠原徳之編　1980　『有家町内における文化財の分布調査』有家町の文化財報告第１集　有家町教育委員会
有家町郷土誌編纂委員会編　1981　『有家町郷土誌』　有家町
長崎県教育委員会編　1994　『長崎県遺跡地図』島原市・南高来郡地区　長崎県文化財調査報告書第111集　長崎県教育委員会
村川逸朗　1997　『西鬼塚支石墓・石棺群』有家町埋蔵文化財調査報告書第３集　有家町教育委員会
古門雅高編　2004　『下木場遺跡』長崎県文化財調査報告書第179集　長崎県教育委員会
本多和典・酒井希望　2018　『東大窪遺跡』南島原市文化財調査報告書第11集　南島原市教育委員会




第１図　有家町内遺跡地図（S＝1/50, 000）

# 第Ⅱ章　調査の概要

## 第１節　調査に至る経緯

有家町内では平成６年頃から複数の基盤整備事業計画があり，これらに伴い県文化課は町内の現地踏査を行い，事業計画との調整を図っていた。その中で，平成11年に大苑地区県営畑地帯総合整備事業（担い手育成型）が認可され，大苑地区土地改良区が設立された。事業計画は約60ha である。町教委は長崎県島原振興局（以下，振興局）の依頼を受け，大苑地区試掘調査，範囲確認調査を実施している。この試掘調査で宮野遺跡は確認された。

調査結果をもとに遺跡の取扱いについて開発部局と保護部局と協議，調整を重ね，計画区域内に所在する宮野遺跡，大苑遺跡，通野遺跡の３遺跡の本調査が必要と判断した。基本方針として整備事業と営農の都合上，工事着工前年度までに現地調査を完了することとした。

## 第２節　調査組織等

平成16年度に振興局から町教委へ，宮野遺跡内の道路及び切土計画部分の約1,000㎡の調査依頼があり，発掘調査と事業計画を調整した結果,16年度と17年度に分け，以下の体制で調査を実施した。

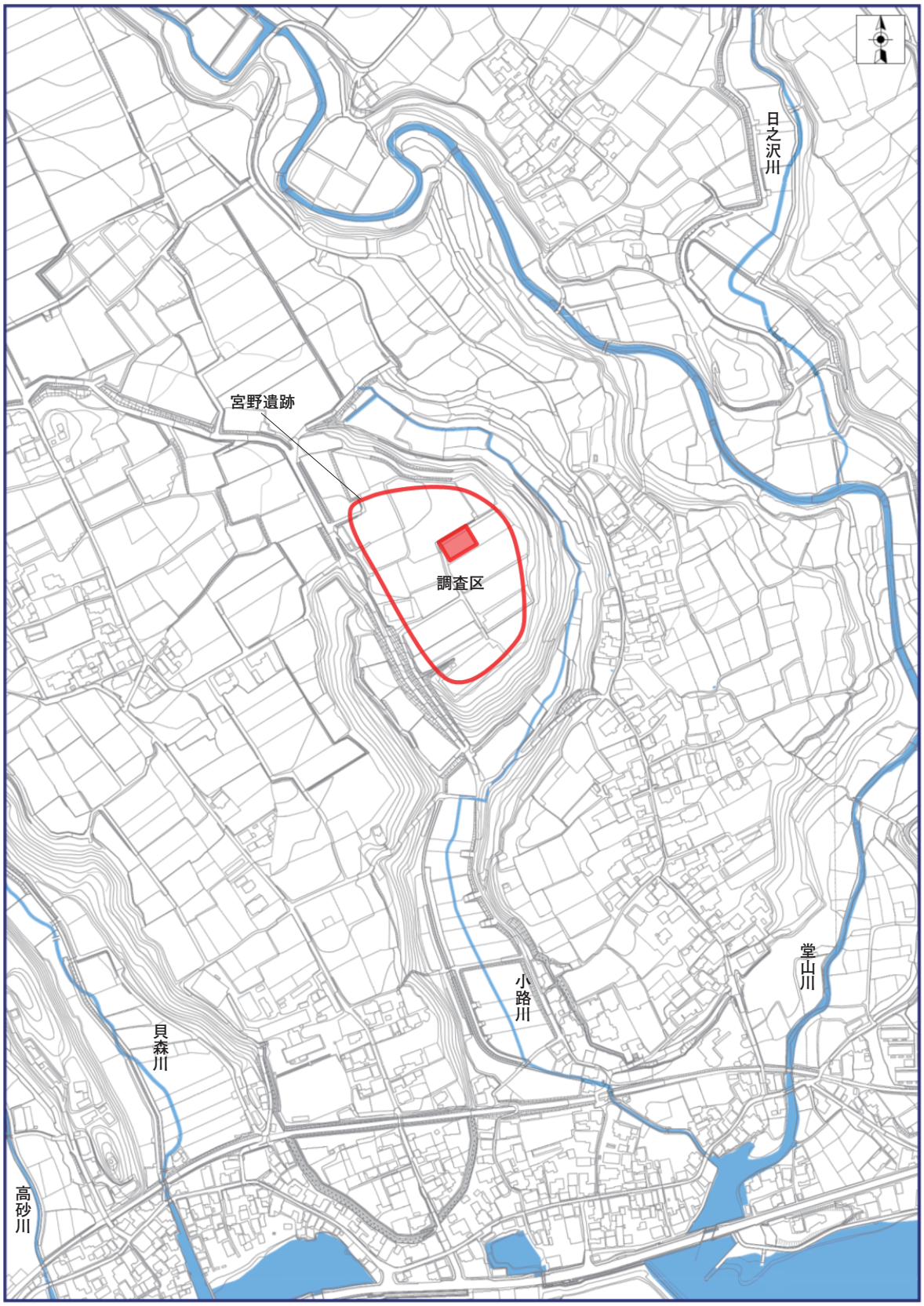
| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 平成16年度 | 調査体制 | 有家町教育委員会 | 教育長 | 松島　吉郎 |
| | | | 教育次長 | 田出　義正 |
| | | | 社会教育係長 | 野原　文博 |
| | | | 社会教育係 | 荒木　伸也（調査担当） |
| | 調査期間 | 平成16年９月６日～10月７日 | | |
| | 調査面積 | 160㎡ | | |
| 平成17年度 | 調査体制 | 有家町教育委員会 | 教育長 | 松島　吉郎 |
| | | | 教育次長 | 田出　義正 |
| | | | 課長補佐 | 野原　文博（兼社会教育係長） |
| | | | 社会教育係 | 荒木　伸也（調査担当） |
| | 調査期間 | 平成17年８月２日～９月23日 | | |
| | 調査面積 | 905㎡ | | |

## 第３節　調査区の設定と調査の方法（第３図）

平成16年度は道路計画部分を中心に調査区（A）を設定した。東西方向の長軸は34m，短軸は東側で４m，西側で2.5m を測る。その他に４m 四方の調査坑（Ｂ１・Ｂ２）を任意で設定して調査を実施した。小型バックホウで表土を剥ぎ，人力による掘削を行った。

17年度は切土計画部分を中心に調査区を設定した。調査の掘削土や工事の表土置き場が限定されたため調査区を大きく二分割し，更にその中に小調査区を任意に設定し調査を進めた。前期調査区（C~K）は小型バックホウで表土を剥ぎ，後期調査区（L~R）は工事受注者の協力を得てバックホウで表土剥ぎを実施し，人力による掘削を行った。

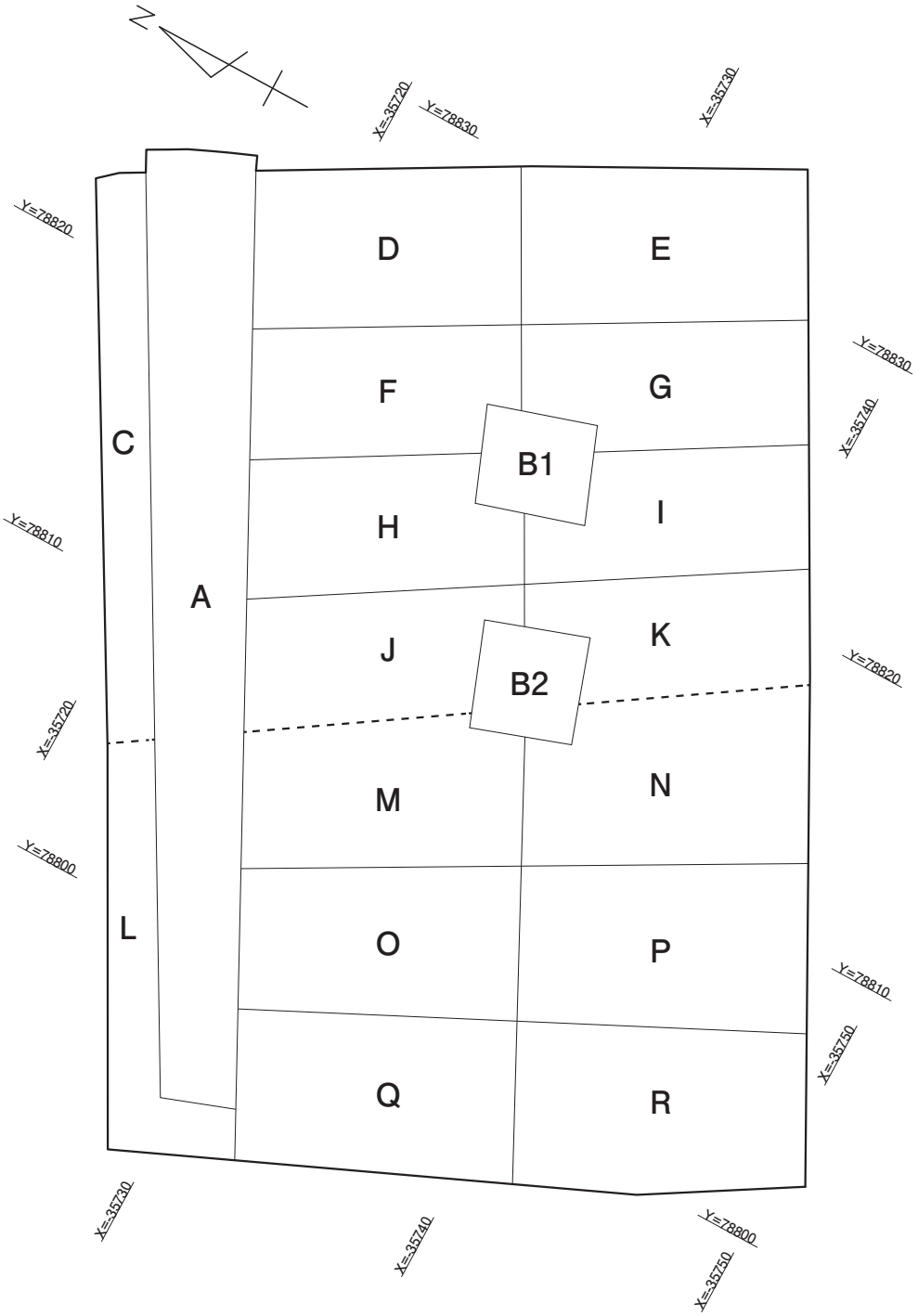
各年度のすべての調査において，遺物包含層掘削，遺構検出及び掘り下げ後，必要に応じて写真撮




0　200m

第２図　調査区位置図（S＝1/6,000）

影，遺構実測を行った。実測には日本測地系の座標を用いた。17年度はラジコンヘリによる航空写真撮影を実施した。




**第３図　区画割付図（Ｓ＝1/250）**

| | | |
|---|---|---|
| 道路計画部分ほか調査 | A，B１・B２ | 平成16年度 |
| 切土計画部分調査 | C~K | 平成17年度前期 |
| | L~R | 平成17年度後期 |

# 第Ⅲ章　調査成果

## 第１節　土層（第４図）

調査によって確認された層序は，以下のとおりである。

Ⅰａ層　褐灰色土（表土，耕作土）　　Ⅱ　層　暗褐色土

Ⅰｂ層　灰褐色土（表土，硬化土）　　Ⅲ　層　明黄褐色土

Ⅰａ層は表土（耕作土）で，Ⅰｂ層は長年の耕作により締め固められた表土である。現地調査の土層確認では，耕作土をⅠａ層，硬化土をⅠｂ層としたが，遺物整理ではⅠ層として取り扱った。Ⅱ層は遺物包含層，Ⅲ層上面は遺構検出面である。遺構検出時にⅢ層からも遺物が出土したため，遺構完掘，実測後に工事の工程と調整し，可能な限りⅢ層の掘り下げを行った。なお試掘調査ではⅣ層の褐色土層を確認したが，Ⅳ層上面で遺構等は確認できなかった。

## 第２節　遺構（第５図）

Ⅲ層上面が遺構検出面である。６条の溝を確認したが，耕作の影響などを受けているため，切り合い等不明確な部分が多い。その他にピットを確認した。

溝１は，南西－北東方向に走る。幅60～90cm，深さ５～30cmを測る。北西－南東方向に走る溝４に切られる。

溝２は，南西－北東方向に走る。幅70～190cm，深さ20～40cmを測る。調査区西側では溝１と平行して走り，溝４と交差するが切り合いは確認できなかった。交差した地点から東へ走り，溝３を切っている。

溝３は，調査区南東側で鉤の手状に確認された。幅50～150cm，深さ40～60cmを測る。溝２・５に切られる。

溝４は，北西－南東方向に走る。幅50～120cm，深さ５～25cmを測る。溝５に繋がるかは確認できなかった。

溝５は，調査区の南東側で鉤の手状に確認された。幅50～150cm，深さ10～45cmを測る。

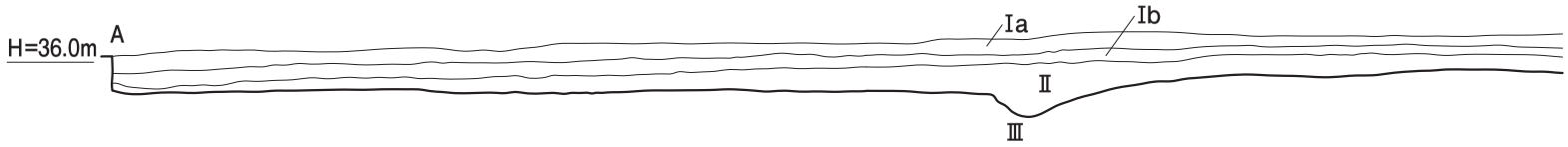
溝６は，北西－南東方向に走る。幅60～150cm，深さ30～35cmを測る。

それぞれの溝内の出土遺物から，溝１～６は近世の溝と考えられる。

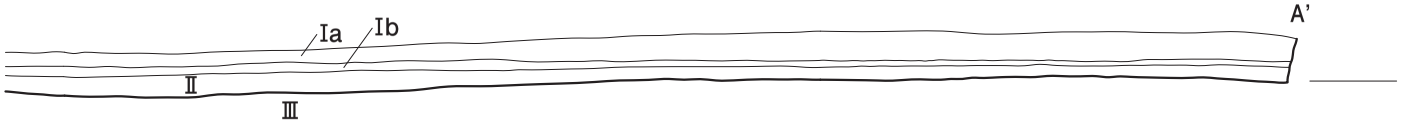
## 第３節　溝内出土の遺物（第６図）

**１・２**は溝１出土で，摩滅しているが弥生土器底部の資料である。**１**の復元底径は8.2cm，**２**の底径は6.2cmを測る。**３～５**は溝２出土である。**３**は瓦質土器の火鉢である。突帯間に４本単位のスタンプを施す。**４・５**は瓦質土器の擂鉢である。**４**は５本単位，**５**は８本単位のクシ目を入れる。**６**は溝３出土で，玉縁の白磁である。**７～９**は溝５出土である。**７**は粗製深鉢の胴部である。貝殻条痕調整を施す。**８**は摩滅しているが，土師器の甕の口縁部資料である。**９**は須恵器で，内面にタタキ調整を施す。**10・11**は溝６出土で，鋤先状口縁の資料である。**10**は厚めの口縁が水平に張り出す。**11**は口縁が上がり気味に張り出し，横ナデ調整を施す。

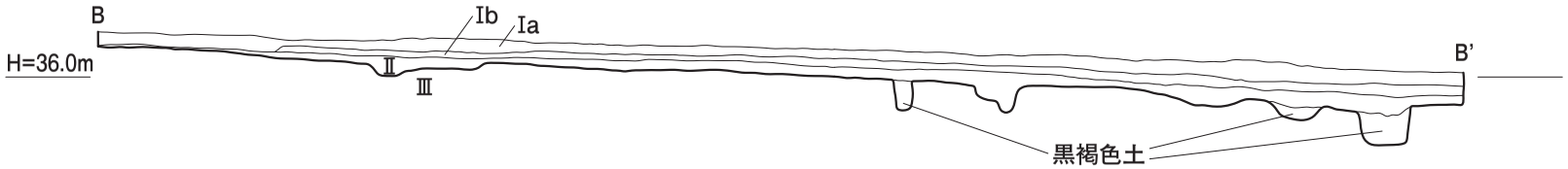
調査区　南東壁（東半部）

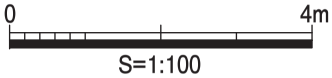



調査区　南東壁（西半部）

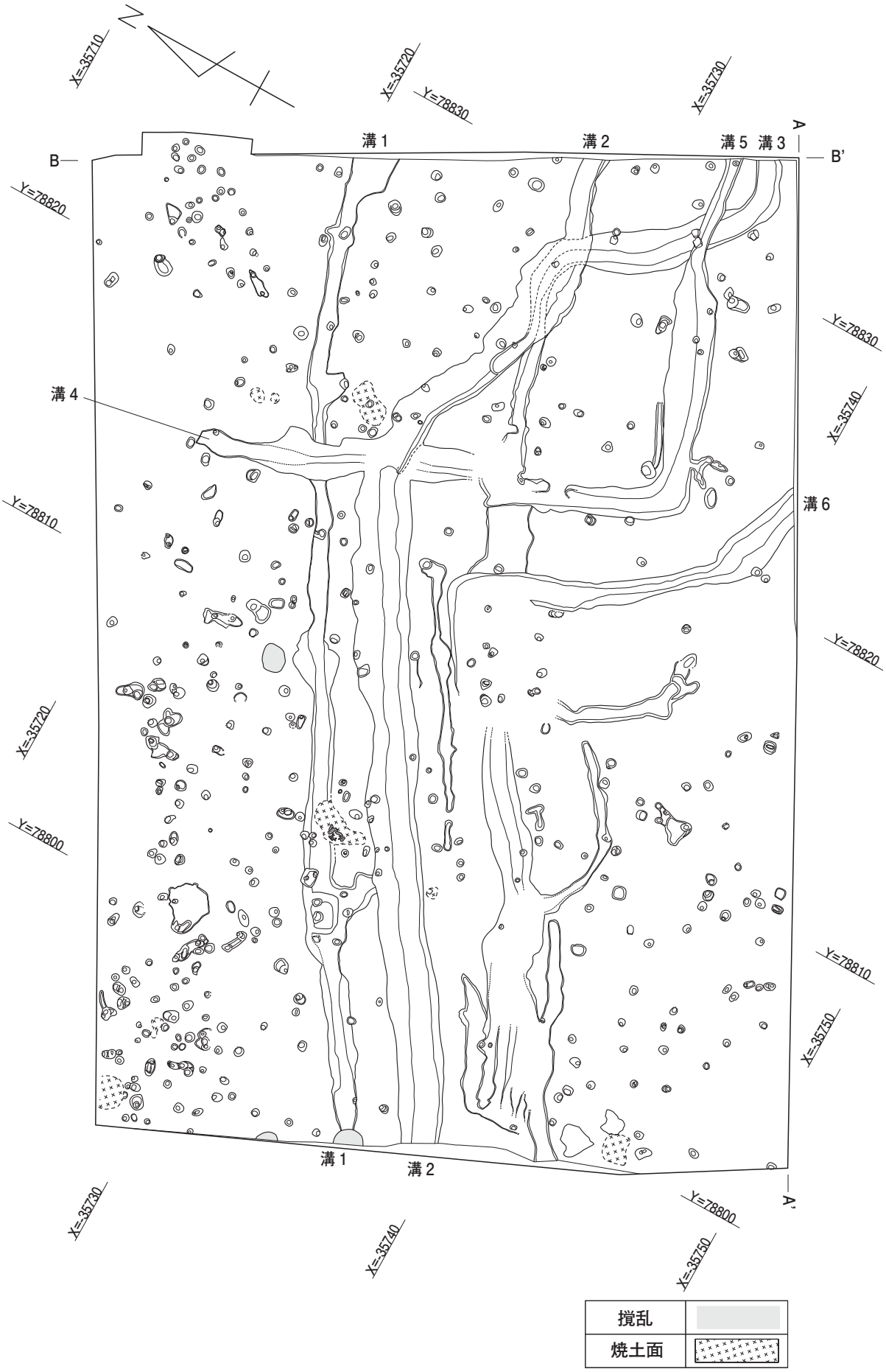



調査区　北東壁

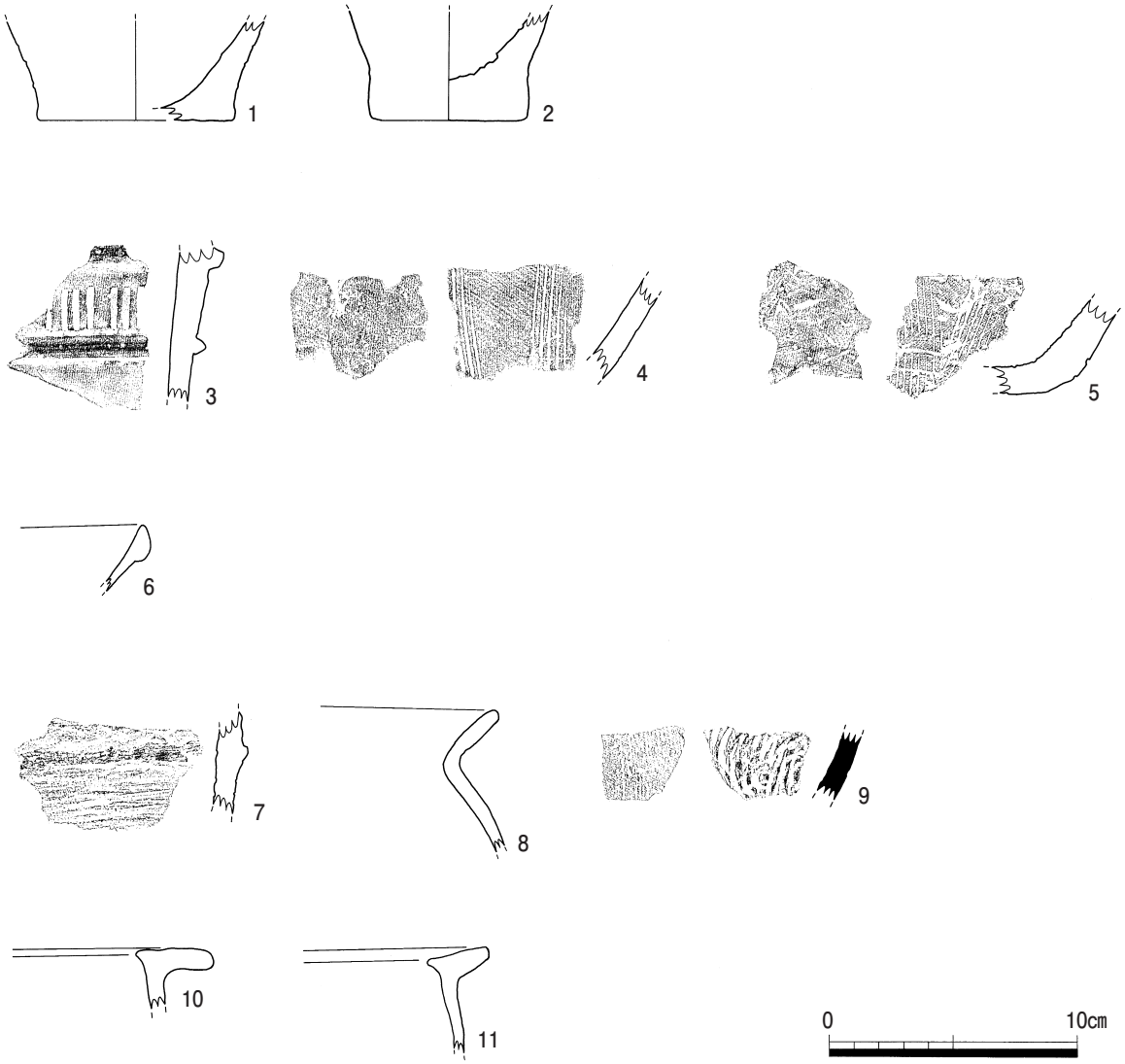



第４図　土層図




第 5 図　遺構実測図（S＝1/200）




第６図　溝内出土の遺物（S＝1/3）

第１表　溝内出土の遺物観察表

| 図 | 番号 | 器種 | 遺構 | 文様・調整 | | 色調 | | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 6 | 1 | 甕 | 溝１ | 不明 | ナデ | にぶい黄橙・にぶい橙 | にぶい黄橙 | 石英・白色粒子 | |
| | 2 | 甕 | 溝１ | ハケ目 | 不明 | にぶい橙 | にぶい橙 | 石英・白色粒子・赤色粒子 | |
| | 3 | 火鉢 | 溝２ | ナデ | ハケ目・ナデ | 暗灰 | 暗灰 | 角閃石・長石 | |
| | 4 | 擂鉢 | 溝２ | ナデ | ハケ目･クシ目 | 淡黄 | 灰白 | 長石・石英 | |
| | 5 | 擂鉢 | 溝２ | ナデ | ハケ目･クシ目 | 灰黄 | 灰黄 | 石英・赤色粒子 | |
| | 6 | 碗 | 溝３ | － | － | 灰白 | 灰白 | | 玉縁口縁 |
| | 7 | 深鉢 | 溝５ | 貝殻条痕 | ナデ | 褐灰 | にぶい黄褐 | 長石・石英・角閃石 | |
| | 8 | 甕 | 溝５ | ナデ | ナデ | にぶい橙・にぶい黄橙 | にぶい橙 | 長石・石英・角閃石 | |
| | 9 | 甕ヵ | 溝５ | ハケ目 | 同心円文 | 灰白 | 黄灰 | 石英 | |
| | 10 | 甕 | 溝６ | ナデ | ナデ | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 長石・石英 | |
| | 11 | 甕 | 溝６ | ナデ | ナデ | 黒褐・にぶい橙 | にぶい橙 | 長石・石英 | |

## 第４節　包含層ほか出土の遺物

### ⑴　土器・陶磁器類

**縄文時代早期の土器（第７図）**

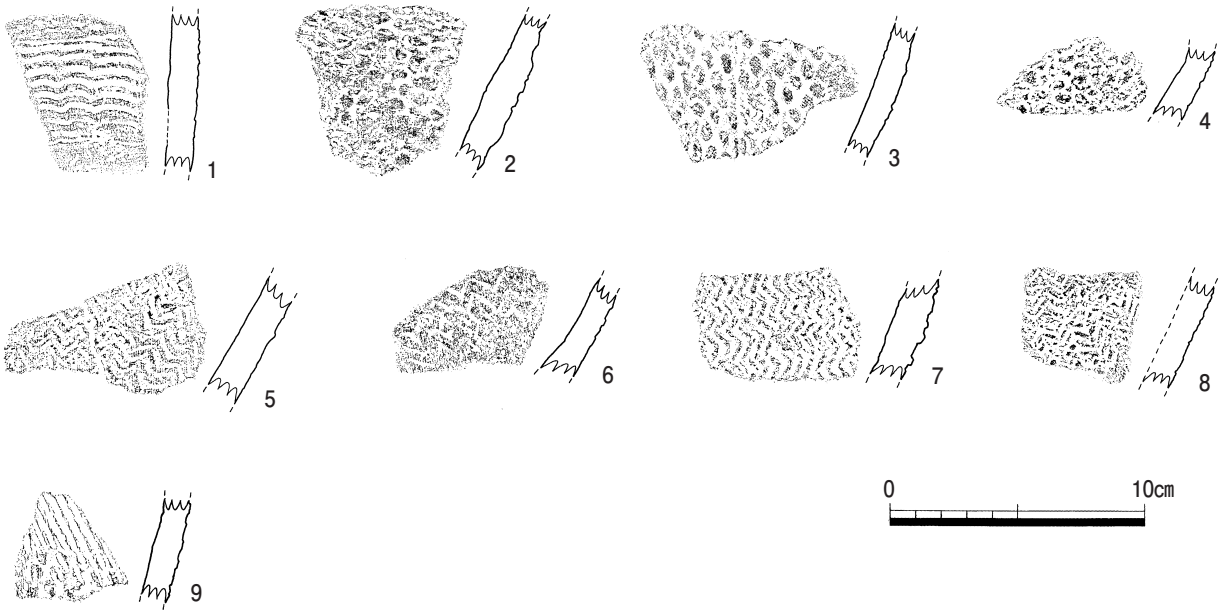
**1** は円筒形土器の口縁部近くの資料である。外面には横方向の貝殻条痕文を緩く波打たせて施し，下部には空白部を残す。**2**～**9** は，押型文土器の資料である。**2**～**4** は楕円文，**5**～**8** は山形文である。**9** は楕円文と平行文が観察され，異種の原体を併用している。

**縄文時代後期～突帯文期の土器（第８図～第11図）**

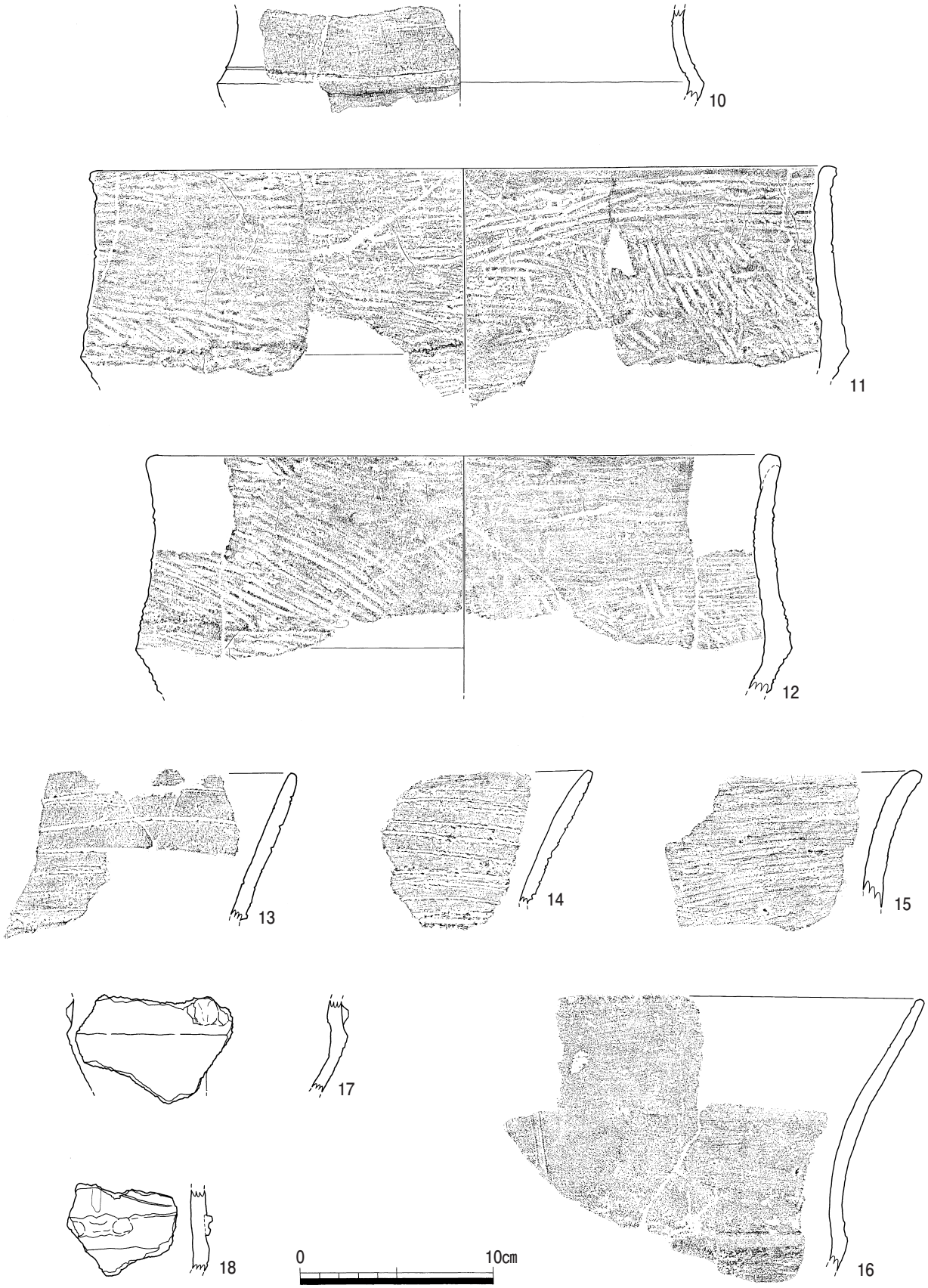
**10**は鉢の胴屈曲部から頸部にかけての資料である。頸部は上位で大きく外反し，いわゆるタガ状口縁と呼ばれる凹線もしくは沈線を数条施す文様帯がつくものと思われる。胴屈曲部直上の外面には段を設け，内外面ともに研磨調整を施す。屈曲部での復元径は25.3cm を測る。

**11**・**12**は胴部上位で屈曲する粗製深鉢で，どちらも口縁部はやや内傾し，内外面ともに貝殻条痕調整を施す。**11**は復元口径38.8cm，復元胴部最大径40.0cm を，**12**は復元口径33.0cm，復元胴部最大径34.2cm を測る。

**13**～**16**は胴部でいったん屈曲し，口縁部は大きく外傾する粗製深鉢の資料である。**13**・**14**は横方向の平行沈線を引く。**16**は口縁部から胴屈曲部にむかって２条の垂下沈線を引く。**13**・**14**・**16**は比較的薄手の器壁であるが，**15**は厚手の作りで，外面には貝殻条痕調整を施す。**17**・**18**は胴屈曲部の直上に貼付文を施す。**17**の胴屈曲部での復元径は14.6cm である。**18**は胴屈曲部直上に段を作り，口縁部には垂下沈線と弧状沈線を施す。




**第７図　縄文時代早期の土器（S＝1/3）**

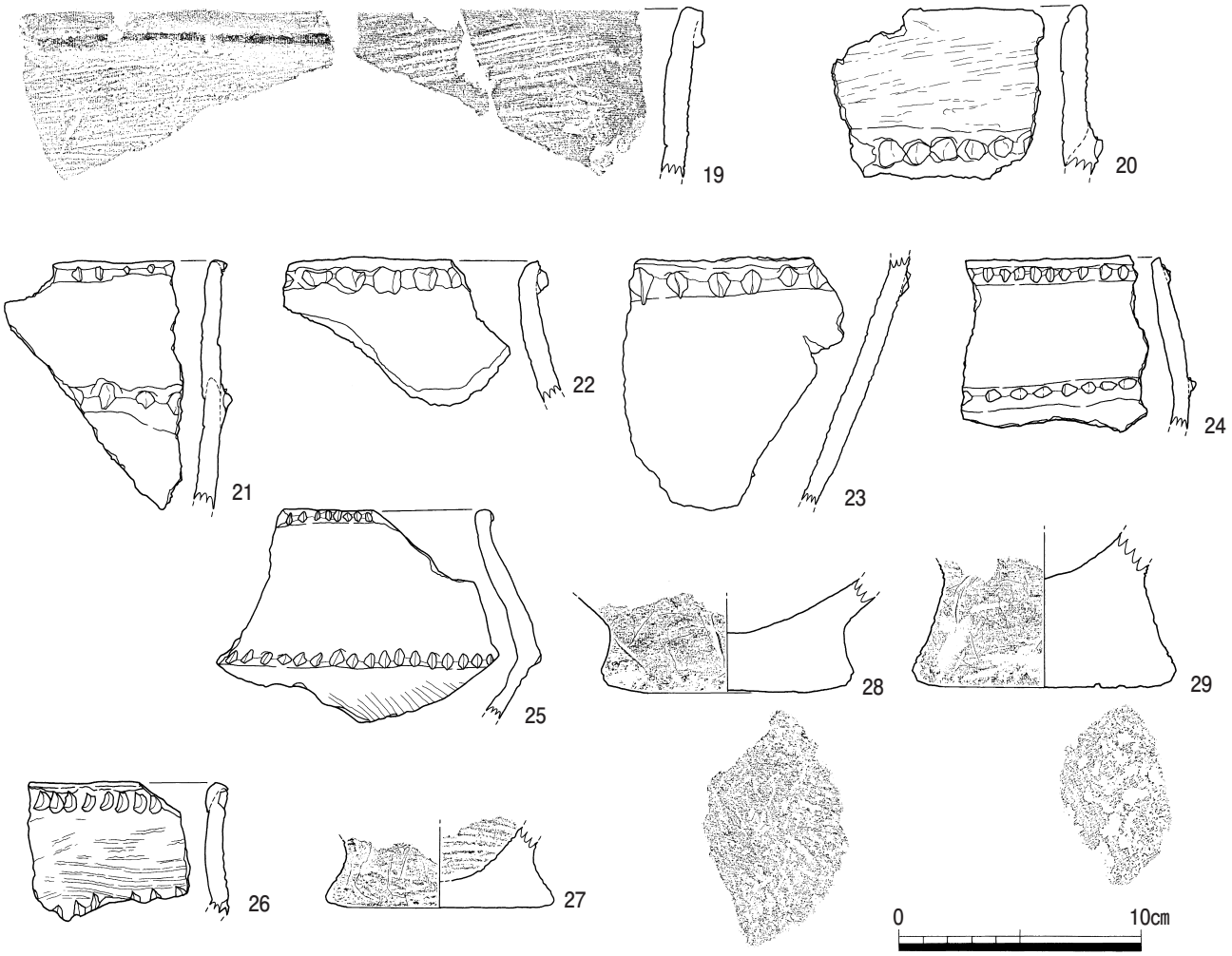



第８図　縄文時代後期～突帯文期の土器①（S＝1/3）

**19**は刻目のない突帯をもつ口縁部の資料である。口唇部上端は平坦に整えている。**20**〜**26**は刻目突帯文土器である。**20**・**22**・**23**は指先による刻目である。**20**の突帯は胴部のみであり，口縁部外面には横方向の貝殻条痕を施す。**22**は強く内傾する口縁部の資料で，口縁部の突帯は口唇部からわずかに下がる。**21**は２条の突帯をもつが，胴部での明瞭な屈曲はない。口縁部の突帯は非常に細く，ヘラ状工具による刻目を施すが，胴部は指による刻目である。**24**・**25**は２条の突帯をもち，ヘラ状工具による刻目を施している。**26**は突帯をもたず，半裁した棒状工具の先端を直接器壁に刺突して刻目を施している。

**27**・**28**は断面が張り出す形状の底部で，粗製深鉢もしくは突帯文土器の資料である。**28**は底面に原体は不明であるが組織痕が残る。**29**は非常に分厚い底部で，底面に10数個の２mm 大の円形圧痕が残る。復元底径は，**27**が9.4cm，**28**が10.4cm，**29**が10.8cm を測る。

**30**は復元口径20.6cm を測る粗製の鉢かあるいは浅鉢の資料である。外面には縦方向の貝殻条痕調整を残し，口唇部上端にはおそらく二枚貝殻頂によるものとみられる刻目を施す。**31**は半粗半精の椀形土器で，外面には貝殻条痕調整を残すが，内面はよく研磨している。口径13.5cm，器高7.2cm を測る。外面上半には煤の付着が認められる。

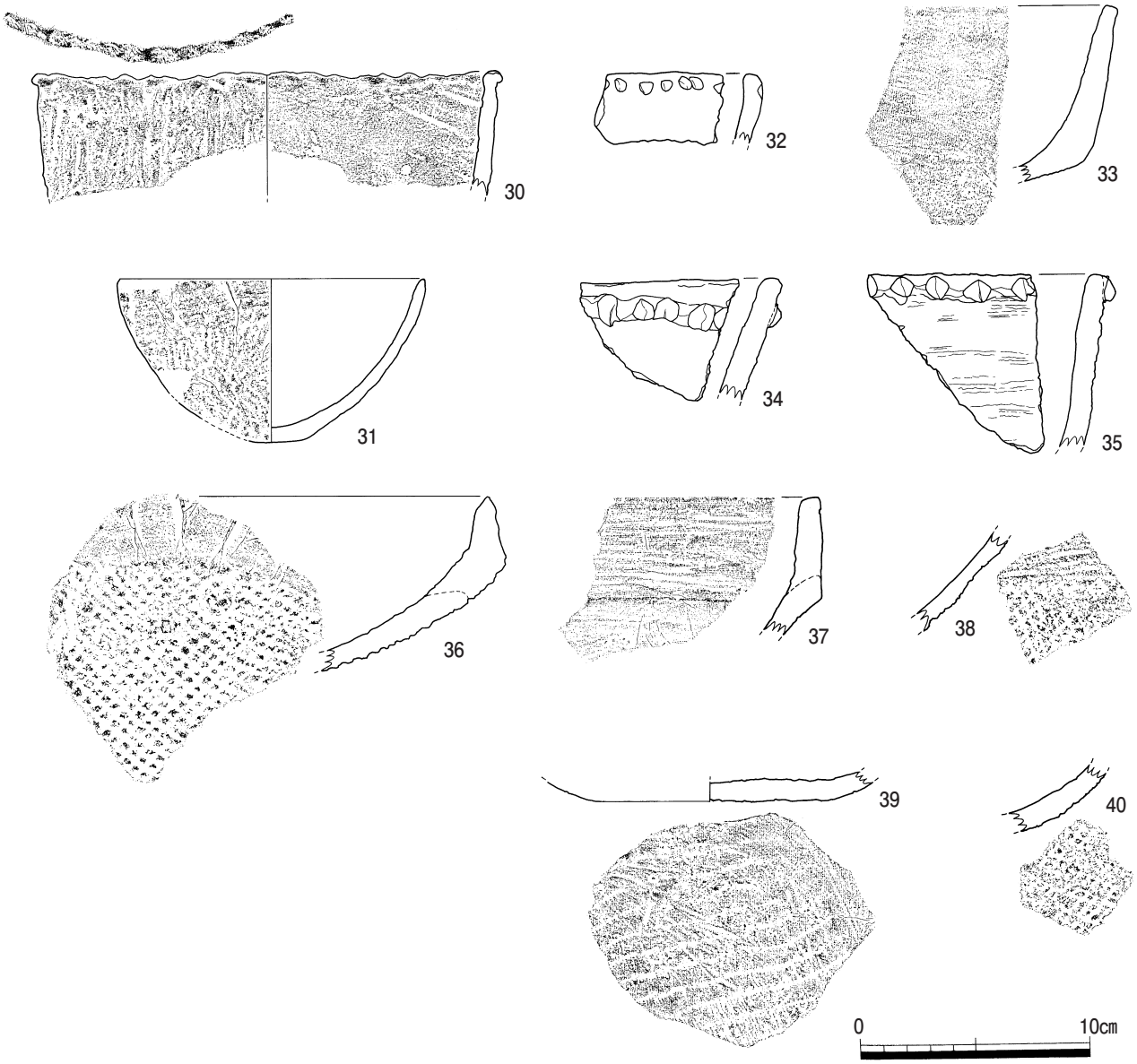



**第９図　縄文時代後期〜突帯文期の土器②（S＝1/3）**

**32**〜**35**はボール状もしくは洗面器状の器形をなす浅鉢の口縁部である。**32**の外面には棒状工具先端部の刺突による刻目が認められる。**34**・**35**は口縁部に指による刻目を施した突帯をもつ。

**36**〜**40**は型取り技法によって成形を行った組織痕土器である。いずれもボール状もしくは洗面器状の器形をなすものと考えられる。**36**・**38**・**40**には網目の圧痕が残る。また，**39**は底面の資料で，アンギンの圧痕が残る。**37**は口縁部の資料で，型取りの粘土板の上部に粘土紐の輪積みを行って器高を高くしているが，本来組織痕の残る口縁部下の部分は粘土の掻き取りを行っていて，組織痕は観察できない。

**41**〜**54**は精製の浅鉢である。**41**はやや外傾して立ちあがった口縁部の外面に１条の沈線を引く。**42**は外傾する口縁部の外面に２条の凹線を引く。**43**は黒色磨研の大きく開く口縁部の資料で，口唇部は内面を玉縁に仕上げ，外面には１条の沈線を引く。**44**は大きく張り出した胴部をもち，大きく外傾し



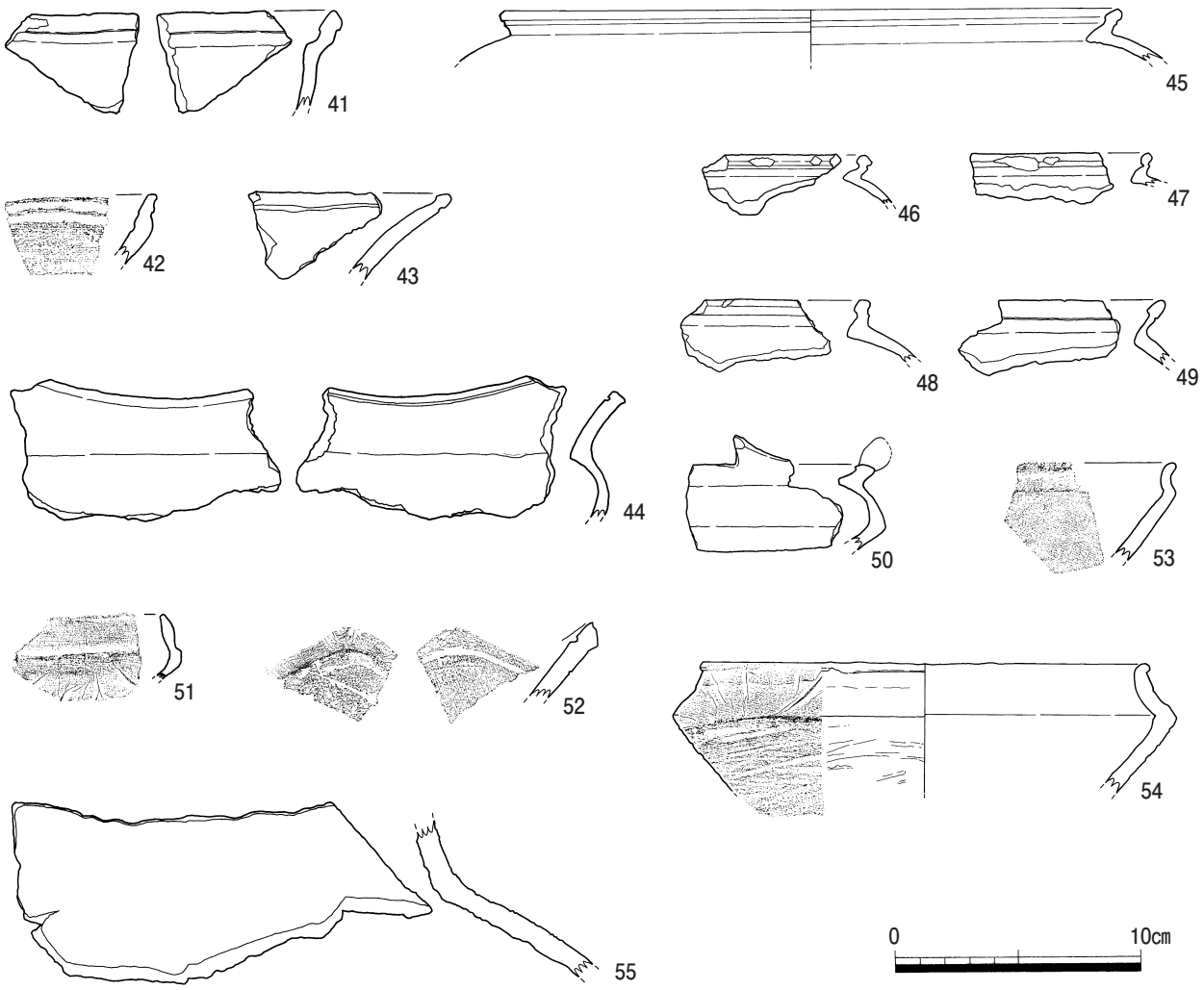

**第10図　縄文時代後期〜突帯文期の土器③（S＝1/3）**

てのびる口縁部は波状をなし，口唇部内面には沈線１条を引く。**45〜49**は大きく張り出した胴部にやや外傾する短い口縁部がつく浅鉢で，いずれも口唇部は内面を玉縁にし，外面には１条の沈線を引く。**45**の復元口径は25.0cm を測る。**50**は**45〜49**同様に強く張り出す胴部に短い口縁部がつく器形である。ただ，胴部で屈曲して稜を作り，口縁部外面の沈線はすでに消滅しており，**45〜49**のような胴張りの浅鉢から**53・54**のような逆「く」字形の屈曲をみせる浅鉢への型式変化をつなぐ資料といえよう。口縁部にヒレ状突起を付す。

**51**は口径10cm程度に復元される小型の資料で，外面に段をもつ。**52**は波状口縁浅鉢の頂部の資料である。内面に沈線を引く。

**53・54**は逆「く」字形の断面をなす浅鉢である。**53**は口縁部が外反する。**54**の口縁部は内傾し，口唇部外端に段をもつ。胴屈曲部より下位の研磨調整は粗く，貝殻条痕調整が残る。**54**の復元口径は18.4cm，胴屈曲部での復元径は20.6cm を測る。

**55**は丹塗りの比較的大型の壷で，肩部から頸部にかけての資料である。内面は器面の剥落が著しい。外面は，肩部には横方向の，頸部には縦方向の研磨調整が施される。




**第11図　縄文時代後期〜突帯文期の土器④（S＝1/3）**

**弥生時代中・後期の土器（第12図～第14図）**

**56～87**は甕である。**56**，**59～61**は口縁部の外側を肥厚させる資料である。**56**・**57**は出土地点が近く，同一個体の可能性が高い。**56**は復元口径24.3cm，胴部最大径23.6cm を測る。外面には縦方向のハケ目調整を施し，口縁部からやや下がったところに１条の沈線を引く。**57**は底径5.8cm を測り，上げ底となる。**56**同様，縦方向のハケ目調整を施す。**60**は全体をナデ調整によって仕上げるが，口縁部上面にはハケ目調整の痕跡が観察される。

**62～68**は断面逆三角形を呈する口縁部の資料である。**62～65**の復元口径は，順に29.2cm，24.8cm，24.8cm，25.6cm を測る。**66**には焼成前に施された穿孔が認められる。

**69～84**は断面が逆「L」字形あるいは鋤先状をなす口縁部の資料である。厚めの口縁が水平に張り出すもの（**69～72**），厚めの口縁がやや上がり気味に張り出すもの（**73～80**），薄手の口縁が水平に張り出すもの（**81～84**）が認められる。復元口径については，**69**が30.8cm，**70**が29.8cm，**73**が29.6cm，**74**が32.3cm を測る。

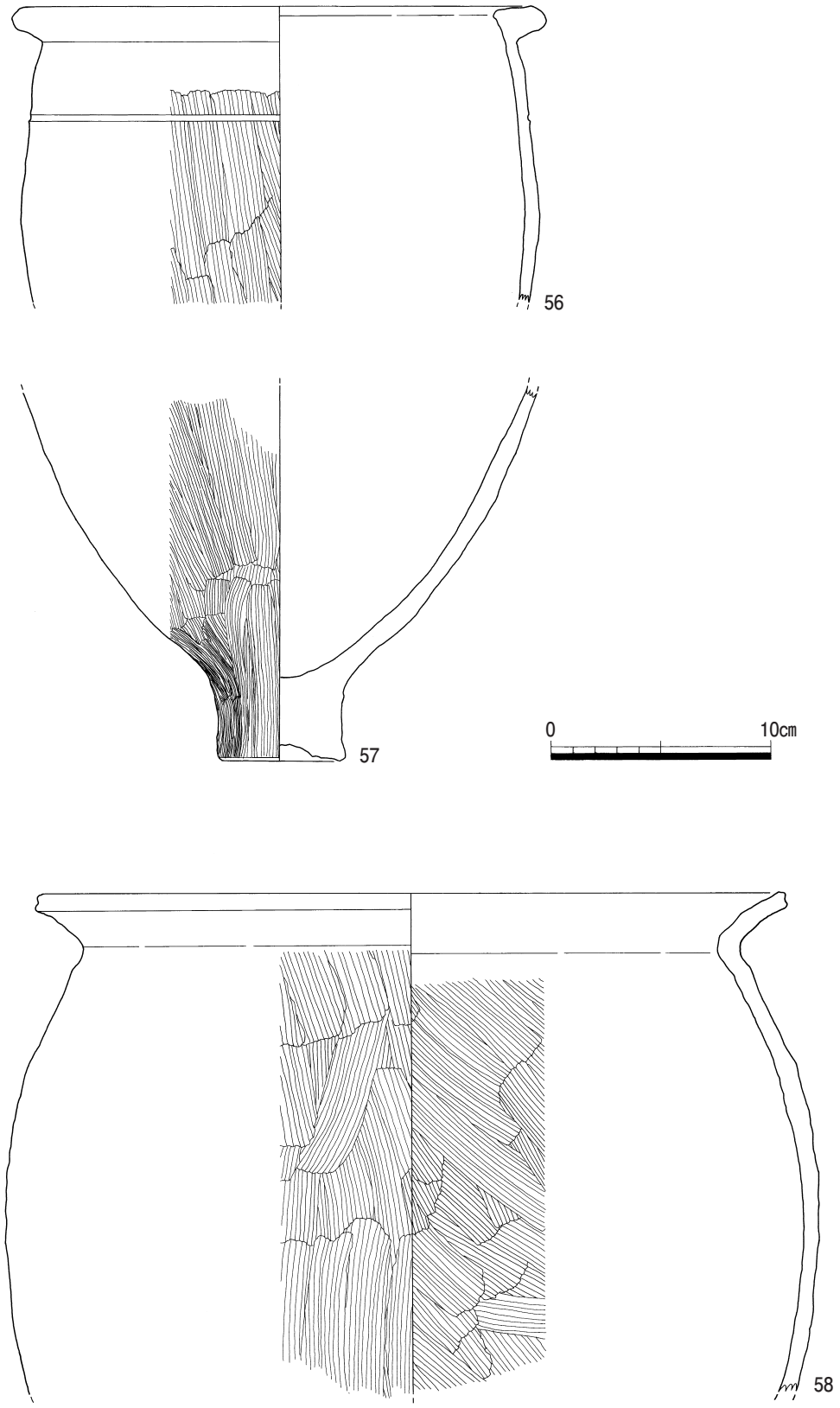
**85～87**は断面が先細りになりながら反り上がる口縁部の資料である。肥後地方の影響を推測する。**85**は復元口径24.8cm を測る。

**58**は口径34.0cm，胴部最大径37.0cm を測る。胴部は最大径からいったんすぼまり，口縁部は外に開いて立ち上がる。内外面ともにハケ目調整を残す。

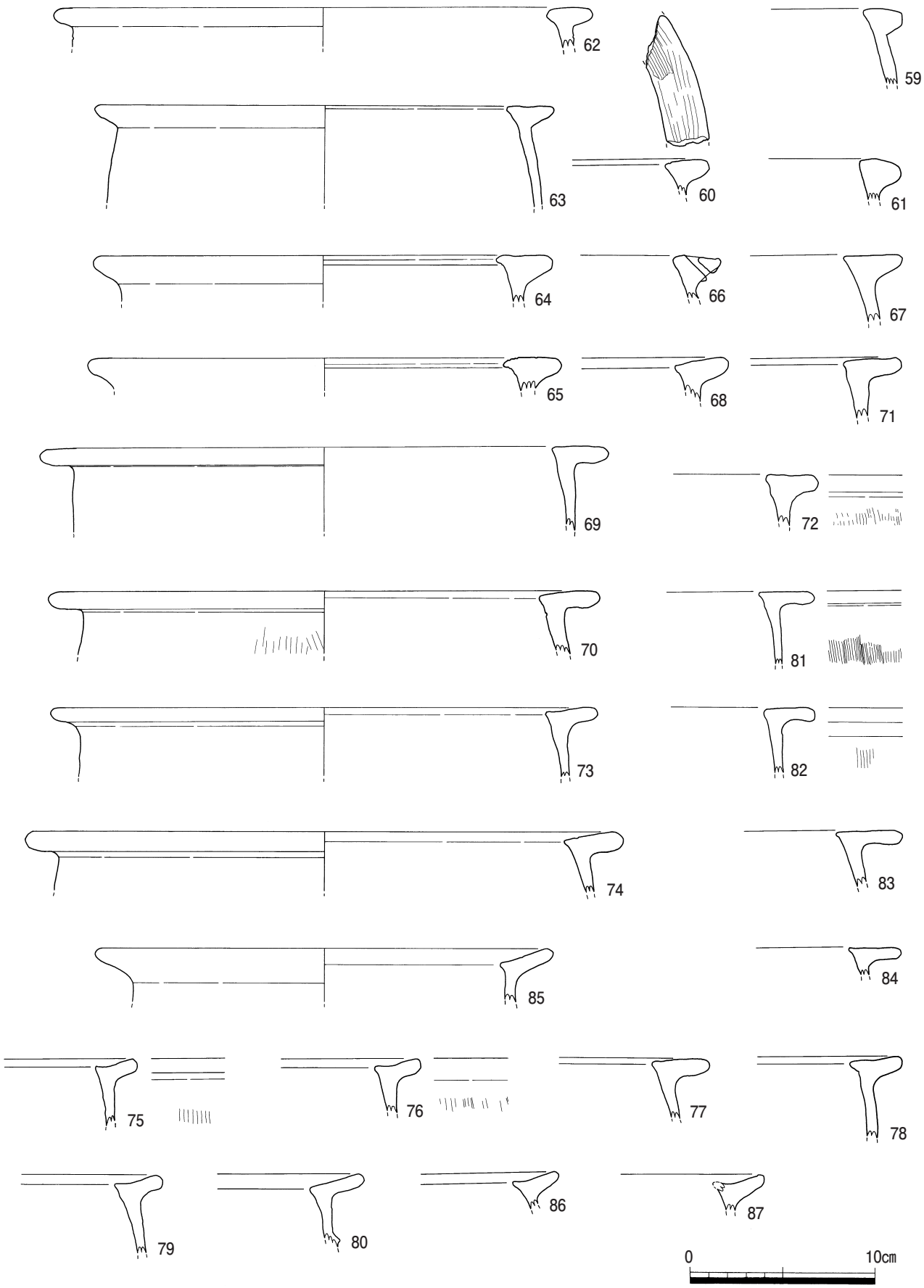
**88**・**89**は丹塗りの甕口縁部である。いずれも鋤先状を呈し，**89**は口縁部からやや下がった位置に断面M字の突帯を付す。**90～92**は比較的大型の甕もしくは壷の胴部資料である。いずれも最下段の突帯が上段より太く，内外面の調整と同じ工具によって刻目を入れる。**91**・**92**は同一個体の可能性がある。

**93～96**は高坏である。**94**は口縁部直下に三角突帯をもち，外面は器面の剥落が著しく観察できないが内面には丹塗りを施す。

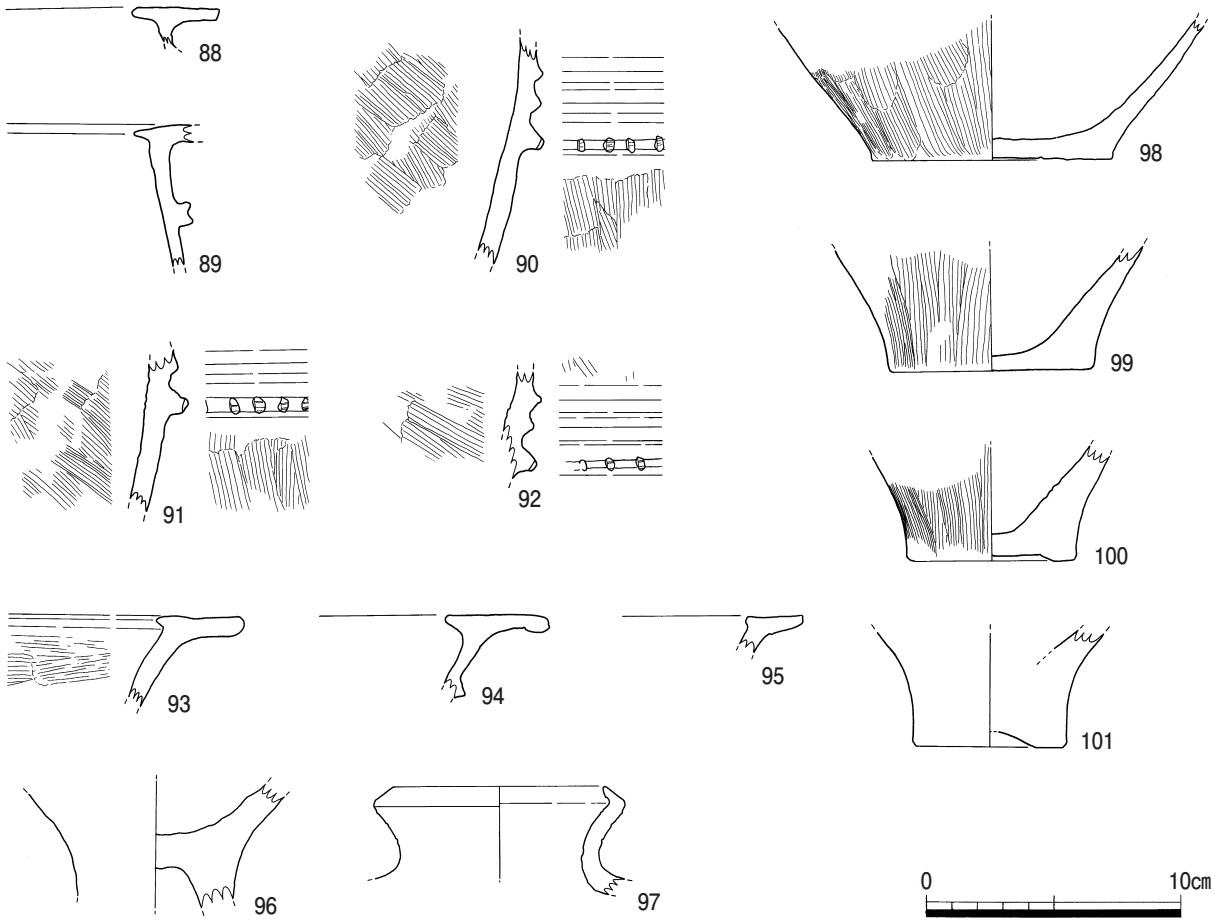
**97**は壷で，複合口縁を呈する。復元口径8.2cm を測る。**98～101**は底部の資料である。復元底径は**98**が9.4cm，**99**が8.1cm，**100**が6.6cm，**101**が6.0cm を測る。**98～100**は外面にハケ目調整を残す。**100**・**101**は上げ底となる。




第12図　弥生時代中・後期の土器①（S＝1/3）




第13図　弥生時代中・後期の土器②（S＝1/3）




第14図　弥生時代中・後期の土器③（S＝1/3）

**古墳時代・古代の土器（第15図　102～112）**

**102～106**は土師器の甕である。**102・103**は薄手の器壁で，口縁部は外傾し，内外面ともにハケ目調整を残す。**104～106**は外反する口縁部の資料である。**104**は復元口径17.0cm を測り，口縁部は内外面ともにナデ調整であるが，胴部については外面にはハケ目調整を，内面にはケズリを施す。**105・106**の口縁部は内外面ともにナデ調整であるが，胴部の内面にはケズリを掛けている。**107**は土師器の埦である。外開きの高台がつき，内外面ともよく研磨する。

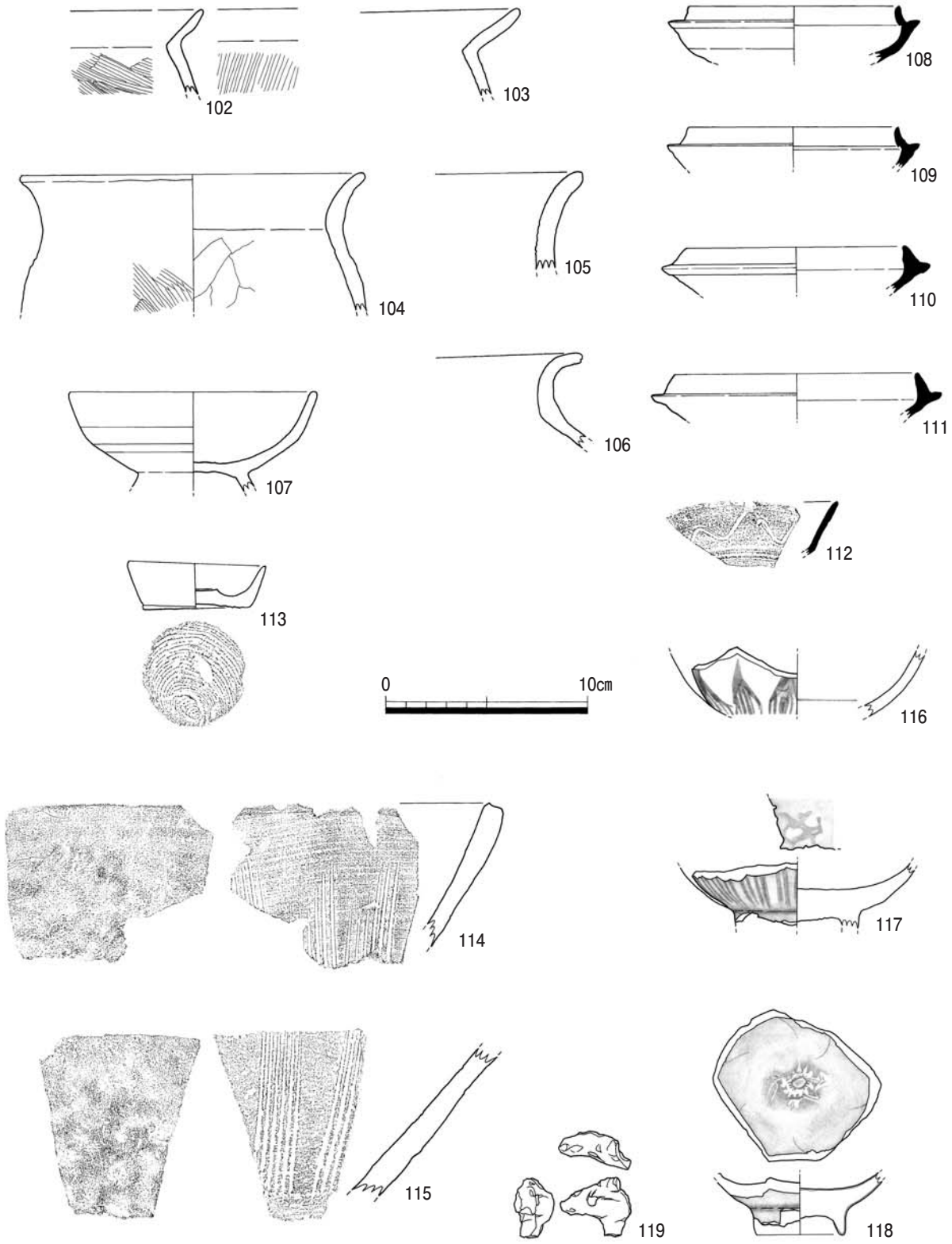
**108～112**は須恵器である。**108～111**は坏の資料で，復元口径は順に10.4cm，10.4cm，10.8cm，12.0cm を測る。**112**は二重口縁壷である。外面には１条の沈線を波状に引く。

**中・近世の土器・陶磁器類（第15図　113～119）**

**113**は土師器の小皿である。口径6.8cm，底径5.3cm を測り，底面には回転糸切りの痕跡を残す。**114・115**は瓦質土器である。いずれも擂鉢で，６本単位のクシ目を入れる。

**116～118**は輸入陶磁器である。**116**は青花碗で，外面には芭蕉文を描く。**117・118**は青磁碗である。**117**は外面に連弁文が，**118**は見込に捻花文と花文が認められる。

**119**は土馬で，細い棒状の工具の刺突により目を表現している。砂粒を含まない非常に精緻な胎土である。




第15図　古墳時代・古代の土器，中・近世の土器・陶磁器類（S＝1/3）

## 第２表　包含層ほか出土の遺物（土器・陶磁器類）観察表①

| 図 | 番号 | 器　種 | 区画 | 層位 | 文様・調整 | | 色　調 | | 胎　土 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 外　面 | 内　面 | 外　面 | 内　面 | | |
| 7 | 1 | 深鉢 | L | Ⅲ | ナデ，貝殻条痕 | ナデ | 浅黄橙 | 浅黄 | 角閃石・長石・石英 | |
| | 2 | 深鉢 | | Ⅲ | 楕円押型文 | ナデ | 明黄褐 | 浅黄 | 角閃石・長石・石英 | |
| | 3 | 深鉢 | | Ⅲ | 楕円押型文 | ナデ | 橙 | 浅黄 | 角閃石・長石・石英 | |
| | 4 | 深鉢 | G | Ⅲ | 楕円押型文 | ナデ | 橙 | にぶい黄橙 | 角閃石・長石・石英 | |
| | 5 | 深鉢 | | Ⅲ | 山形押型文 | ナデ | 橙 | にぶい橙 | 角閃石・長石・石英 | |
| | 6 | 深鉢 | | Ⅱ | 山形押型文 | ナデ | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 角閃石・長石・石英 | |
| | 7 | 深鉢 | | Ⅲ | 山形押型文 | ナデ | 明黄褐 | 浅黄 | 角閃石・長石・石英 | |
| | 8 | 深鉢 | E | | 山形押型文 | 不明 | にぶい黄橙 | 浅黄 | 角閃石・長石・石英 | |
| | 9 | 深鉢 | | Ⅲ | 平行押型文，楕円押型文 | ナデ | にぶい黄褐 | にぶい黄橙 | 角閃石・長石・石英・赤色粒子 | |
| 8 | 10 | 鉢 | R | Ⅲ | 研磨 | 研磨 | 浅黄 | 浅黄 | 角閃石・長石・石英 | |
| | 11 | 深鉢 | C | Ⅱ・Ⅲ | 貝殻条痕 | 貝殻条痕 | にぶい黄褐 | にぶい黄橙・黒 | 角閃石・長石・石英 | |
| | 12 | 深鉢 | A | Ⅱ | ナデ，貝殻条痕 | ナデ，貝殻条痕 | 褐・にぶい黄橙 | にぶい黄褐 | 角閃石・長石・石英 | |
| | 13 | 深鉢 | C | Ⅲ | ナデ，沈線 | ナデ | にぶい黄褐 | 明赤褐 | 角閃石・長石・石英・赤色粒子 | |
| | 14 | 深鉢 | C | Ⅲ | ナデ，沈線 | ナデ | にぶい黄橙 | にぶい黄褐 | 角閃石・長石・石英・赤色粒子 | |
| | 15 | 深鉢 | G | Ⅲ | 貝殻条痕，ナデ | ナデ | にぶい黄褐・暗灰黄 | にぶい黄・暗灰黄 | 角閃石・長石・石英 | |
| | 16 | 深鉢 | | Ⅲ | ナデ，沈線 | ナデ | 橙 | にぶい黄褐 | 角閃石・長石・石英 | |
| | 17 | 深鉢 | A | Ⅱ | 擦過 | ナデ | 灰褐・黒褐 | 明黄褐・黒褐 | 長石・石英 | 貼付文 |
| | 18 | 深鉢 | | Ⅲ | ナデ，沈線 | ナデ | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 角閃石・長石・石英 | 貼付文 |
| 9 | 19 | 甕 | R | Ⅱ | ナデ，貝殻条痕 | ナデ，貝殻条痕 | 明黄褐 | にぶい黄橙 | 角閃石・長石・石英 | 無刻目突帯ヵ |
| | 20 | 甕（突帯文） | N | Ⅱ | 貝殻条痕 | 貝殻条痕 | にぶい黄橙 | にぶい黄褐 | 角閃石・長石・石英 | 指刻み |
| | 21 | 甕（突帯文） | 表採 | | 擦過 | 貝殻条痕 | にぶい黄橙 | 浅黄 | 角閃石・長石・石英 | ヘラ刻み・指刻み |
| | 22 | 甕（突帯文） | | Ⅱ | 擦過 | ナデ | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 角閃石・長石・石英 | 指刻み |
| | 23 | 甕（突帯文） | 表採 | | 擦過 | 貝殻条痕 | にぶい黄橙 | にぶい黄 | 角閃石・長石・石英 | 指刻み |
| | 24 | 甕（突帯文） | 表採 | | ナデ | ナデ | にぶい黄橙 | 明黄褐 | 角閃石・長石・石英 | ヘラ刻み |
| | 25 | 甕（突帯文） | 表採 | | ナデ，貝殻条痕 | ナデ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 角閃石・長石・石英・赤色粒子 | ヘラ刻み |
| | 26 | 甕（突帯文） | 表採 | | 貝殻条痕 | ナデ，貝殻条痕・ナデ | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 角閃石・長石・石英・赤色粒子 | 半裁竹管刺突 |
| | 27 | 甕（突帯文） | C | Ⅲ | ナデ | 貝殻条痕 | 橙 | にぶい黄橙 | 角閃石・長石・石英 | |
| | 28 | 甕（突帯文） | P | Ⅱ | ナデ | ナデ | にぶい褐 | 浅黄 | 角閃石・長石・石英・赤色粒子 | 底面に組織痕 |
| | 29 | 甕（突帯文） | Q | Ⅱ | ナデ | ナデ | 橙 | にぶい黄橙 | 角閃石・長石・石英 | 底面に圧痕 |
| 10 | 30 | 鉢 or 浅鉢 | K | Ⅱ | ナデ，貝殻条痕 | ナデ | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 角閃石・長石・石英 | 口唇部に貝殻圧痕 |
| | 31 | 浅鉢 | I | Ⅱ・Ⅲ | 貝殻条痕 | 研磨 | にぶい黄褐 | 橙 | 角閃石・長石・石英 | |
| | 32 | 浅鉢 | | Ⅱ | ナデ，擦過 | ナデ | にぶい褐 | にぶい褐 | 角閃石・長石・石英 | 棒小口刺突 |
| | 33 | 浅鉢 | A | Ⅲ | ナデ | ナデ | にぶい黄橙 | 浅黄橙 | 角閃石・長石・石英 | |
| | 34 | 浅鉢 | Q | Ⅱ | 擦過 | 擦過・ナデ | にぶい黄橙・暗灰黄 | にぶい黄橙 | 角閃石・長石・石英 | 指刻み |
| | 35 | 浅鉢 | N | Ⅱ | 貝殻条痕 | ナデ | にぶい黄橙 | にぶい黄 | 長石・石英 | 指刻み |
| | 36 | 浅鉢 | R | Ⅱ | ナデ，組織痕 | ナデ | にぶい黄橙 | 橙 | 角閃石・長石・石英 | 網目 |
| | 37 | 浅鉢 | C | Ⅲ | 貝殻条痕・ナデ | ナデ | 明黄褐 | 明黄褐 | 角閃石・長石・石英・赤色粒子 | |
| | 38 | 浅鉢 | | Ⅱ | 貝殻条痕，組織痕 | ナデ | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 角閃石・長石・石英 | 網目 |
| | 39 | 浅鉢 | | Ⅲ | 組織痕 | ナデ | にぶい橙・灰黄褐 | 黒褐・にぶい黄褐 | 角閃石・長石・石英 | アンギン |
| | 40 | 浅鉢 | R | Ⅱ | 組織痕 | ナデ | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 角閃石・長石・石英 | 網目 |

## 第３表　包含層ほか出土の遺物（土器・陶磁器類）観察表②

| 図 | 番号 | 器　種 | 区画 | 層位 | 文様・調整 | | 色　調 | | 胎　土 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 外　面 | 内　面 | 外　面 | 内　面 | | |
| 11 | 41 | 浅鉢 | | Ⅲ | 研磨 | 研磨 | にぶい黄 | にぶい黄 | 長石・石英 | |
| | 42 | 浅鉢 | | | 研磨 | 研磨 | 橙 | にぶい黄褐 | 角閃石・長石・石英 | |
| | 43 | 浅鉢 | R | Ⅱ | 研磨 | 研磨 | 黒褐 | 黒褐 | 長石・石英 | |
| | 44 | 浅鉢 | P | Ⅲ | 研磨 | 研磨，ナデ | 明黄褐 | 橙 | 長石・石英 | 波状口縁 |
| | 45 | 浅鉢 | A | Ⅱ | 研磨 | 研磨 | にぶい橙・にぶい黄橙 | にぶい橙 | 角閃石・長石・石英・赤色粒子 | |
| | 46 | 浅鉢 | I | Ⅱ | 研磨 | 研磨 | 灰黄 | にぶい黄 | 長石・石英 | |
| | 47 | 浅鉢 | B１ | Ⅱ | 研磨 | 研磨 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙・褐灰 | 長石・石英 | |
| | 48 | 浅鉢 | A | Ⅱ | 研磨 | 研磨 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 角閃石・長石・石英 | |
| | 49 | 浅鉢 | C | Ⅰ | 研磨 | 研磨，擦過 | 橙 | 橙 | 角閃石・長石・石英 | |
| | 50 | 浅鉢 | K | Ⅲ | 研磨 | 研磨 | 明黄褐 | 浅黄 | 角閃石・長石・石英 | ヒレ状突起 |
| | 51 | 浅鉢 | O | Ⅲ | 研磨 | 研磨，ナデ | 黒・にぶい橙 | にぶい橙 | 角閃石・長石・石英 | |
| | 52 | 浅鉢 | M | Ⅱ | 研磨 | 研磨 | にぶい黄橙 | 橙 | 角閃石・長石・石英・赤色粒子 | 波状口縁 |
| | 53 | 浅鉢 | A | Ⅱ | 研磨 | 研磨 | にぶい黄橙・灰黄褐 | にぶい黄橙 | 角閃石・長石・石英 | |
| | 54 | 浅鉢 | 表採 | | 研磨 | 研磨 | 明赤褐 | 明赤褐 | 角閃石・長石・石英 | |
| | 55 | 壷 | 表採 | | 丹塗研磨 | 研磨 | 明赤褐 | 明黄褐 | 長石・石英・赤色粒子 | 丹塗 |
| 12 | 56 | 甕 | I | Ⅲ | ナデ，ハケ目 | ナデ | 黄褐 | 明黄褐 | 石英・角閃石・雲母・白色粒子・赤色粒子 | 57と同一個体ヵ |
| | 57 | 甕 | I | Ⅲ | ハケ目 | ナデ | にぶい黄褐 | 明褐 | 石英・角閃石・雲母・白色粒子・赤色粒子 | 56と同一個体ヵ |
| | 58 | 甕 | R | | ナデ，ハケ目 | ナデ，ハケ目 | にぶい黄橙 | 明黄褐 | 石英・角閃石 | |
| 13 | 59 | 甕 | K | Ⅲ | ナデ，ハケ目 | ナデ | 浅黄橙 | 明黄褐 | 角閃石・長石・石英 | |
| | 60 | 甕 | | Ⅲ | ナデ | ナデ | にぶい黄橙 | 橙 | 長石・石英 | |
| | 61 | 甕 | | Ⅱ | ナデ | ナデ | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 長石・石英・雲母 | |
| | 62 | 甕 | K | Ⅱ | ナデ | ナデ | 橙 | にぶい黄橙 | 長石・石英 | |
| | 63 | 甕 | K | Ⅱ | ナデ | ナデ | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 長石・石英・赤色粒子 | |
| | 64 | 甕 | R | Ⅱ | ナデ | ナデ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 角閃石・長石・石英・雲母 | |
| | 65 | 甕 | R | Ⅱ | ナデ | ナデ | 浅黄 | 浅黄 | 角閃石・長石・石英・雲母 | |
| | 66 | 甕 | I | Ⅱ | ナデ | ナデ | にぶい褐 | にぶい褐 | 長石・石英 | 口縁部に焼成前穿孔 |
| | 67 | 甕 | R | Ⅱ | ナデ | ナデ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 角閃石・長石・石英 | |
| | 68 | 甕 | A | Ⅰ | ナデ | ナデ | にぶい赤褐 | にぶい橙 | 角閃石・長石・石英 | |
| | 69 | 甕 | K | Ⅱ | ナデ | ナデ | 橙 | 明黄褐 | 長石・石英 | |
| | 70 | 甕 | K | Ⅱ | ナデ | ナデ | にぶい黄橙 | 明黄褐 | 長石・石英 | |
| | 71 | 甕 | I | Ⅱ | ナデ | ナデ | 橙 | 橙 | 長石・石英 | |
| | 72 | 甕 | P | Ⅱ | ハケ目 | ナデ | にぶい黄褐 | 橙 | 長石・石英 | |
| | 73 | 甕 | K | Ⅱ・Ⅲ | ナデ | ナデ | 橙 | 橙・にぶい黄橙 | 長石・石英 | |
| | 74 | 甕 | K | Ⅱ | ナデ | ナデ | 明黄褐 | にぶい黄橙 | 長石・石英・赤色粒子 | |
| | 75 | 甕 | N | Ⅱ | ナデ，ハケ目 | ナデ | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 長石・石英・雲母 | |
| | 76 | 甕 | N | Ⅱ | ナデ | ナデ | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 長石・石英 | |
| | 77 | 甕 | K | Ⅱ | ハケ目 | ナデ | 橙 | 橙 | 長石・石英・雲母 | |
| | 78 | 甕 | K | Ⅱ | ナデ | ナデ | 浅黄 | 浅黄 | 角閃石・長石・石英・赤色粒子 | |
| | 79 | 甕 | | Ⅱ | ハケ目 | ナデ | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 長石・石英 | |
| | 80 | 甕 | | Ⅱ | ナデ | ナデ | 橙 | にぶい黄橙 | 長石・石英 | |

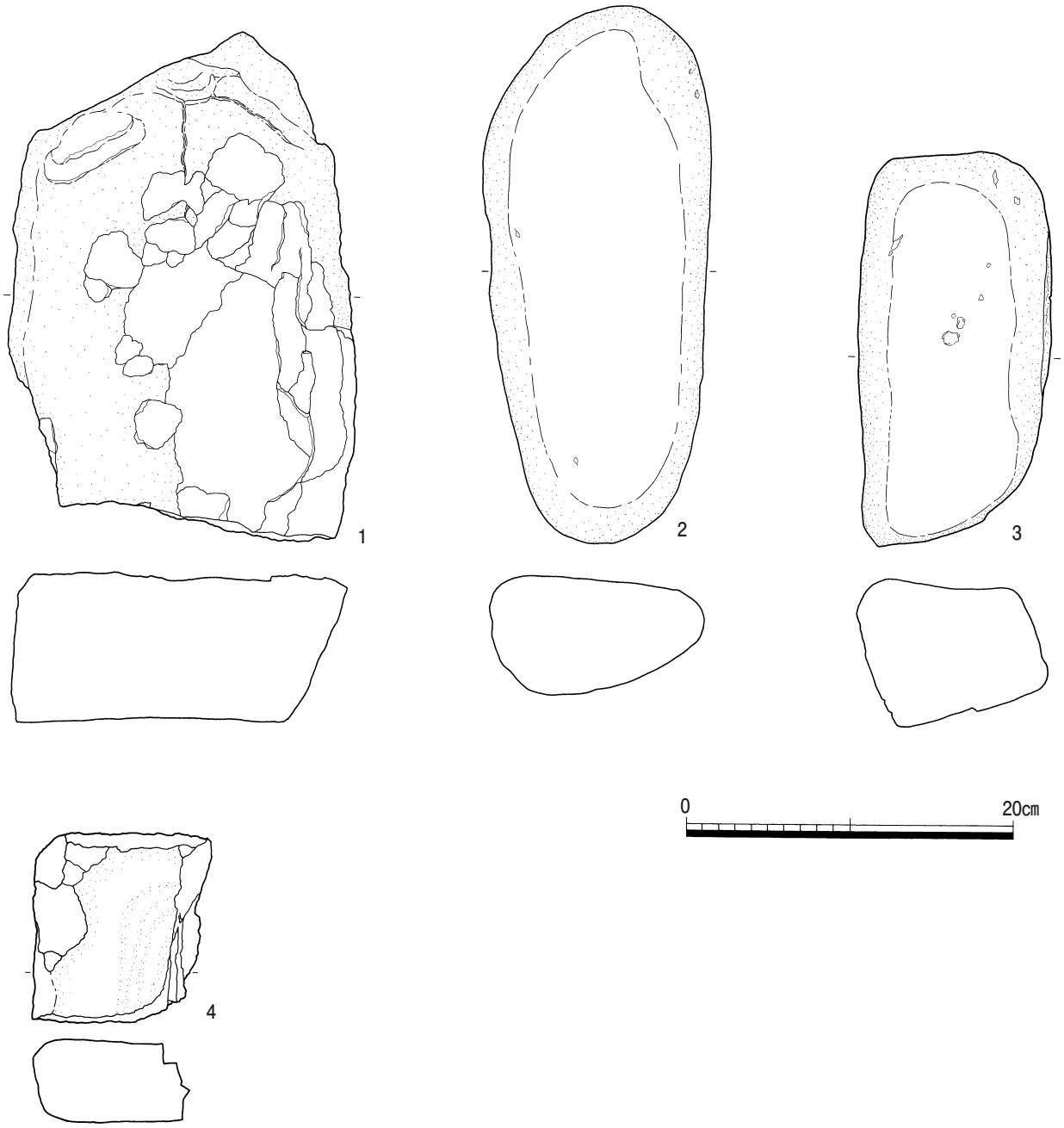
## 第４表　包含層ほか出土の遺物（土器・陶磁器類）観察表③

| 図 | 番号 | 器　種 | 区画 | 層位 | 文様・調整 | | 色　調 | | 胎　土 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 外　面 | 内　面 | 外　面 | 内　面 | | |
| 13 | 81 | 甕 | K | Ⅱ | ナデ，ハケ目 | ナデ | にぶい黄橙 | 明黄褐 | 長石・石英 | |
| | 82 | 甕 | P | Ⅱ | ハケ目 | ナデ | にぶい黄橙 | にぶい黄橙・橙 | 長石・石英 | |
| | 83 | 甕 | N | Ⅱ | ナデ | ナデ | にぶい黄橙 | 橙 | 長石・石英 | |
| | 84 | 甕 | N | Ⅱ | ナデ | ナデ | にぶい黄橙 | にぶい黄褐 | 長石・石英 | |
| | 85 | 甕 | O | Ⅱ | ナデ | ナデ | 橙 | 橙 | 角閃石・長石・石英 | |
| | 86 | 甕 | P | Ⅱ | ナデ | ナデ | 浅黄・暗灰黄 | 浅黄 | 角閃石・長石・石英 | |
| | 87 | 甕 | Q | Ⅱ | ナデ | ナデ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 角閃石・長石・石英 | |
| 14 | 88 | 甕 | I | Ⅱ | 研磨 | ナデ | 明赤褐 | 橙 | 長石・石英・赤色粒子 | 外面丹塗 |
| | 89 | 甕 | | Ⅱ | 研磨 | ナデ | 明赤褐 | 橙 | 長石・石英 | 外面丹塗 |
| | 90 | 甕 or 壷 | I | Ⅱ | ハケ目 | ハケ目 | 橙 | 浅黄 | 長石・石英 | 板状工具刻目 |
| | 91 | 甕 or 壷 | I | Ⅱ | ハケ目 | ハケ目 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 長石・石英 | 板状工具刻目 |
| | 92 | 甕 or 壷 | G | Ⅱ | ハケ目 | ハケ目 | にぶい黄橙 | 浅黄 | 長石・石英 | 板状工具刻目 |
| | 93 | 高坏 | R | Ⅱ | ナデ | ナデ | にぶい黄 | 浅黄 | 角閃石・長石・石英 | |
| | 94 | 高坏 | P | Ⅲ | ナデ | ナデ | にぶい黄橙 | にぶい黄橙・明赤褐 | 長石・石英 | 内外面丹塗 |
| | 95 | 高坏 | P | Ⅱ | ナデ | ナデ | 橙 | 橙 | 長石・石英 | |
| | 96 | 高坏 | A | Ⅱ | ナデ | ナデ | にぶい橙 | 灰褐 | 角閃石・長石・石英 | |
| | 97 | 壷 | O | Ⅲ | ナデ | ナデ | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 角閃石・長石・石英 | |
| | 98 | 甕 | | Ⅲ | ハケ目 | ナデ | にぶい黄橙 | 橙 | 長石・石英 | |
| | 99 | 甕 | Q | Ⅱ | ハケ目 | ナデ | 橙 | にぶい黄 | 長石・石英 | |
| | 100 | 甕 | I | Ⅱ | ハケ目 | ナデ | 橙 | にぶい黄橙 | 長石・石英 | |
| | 101 | 甕 | A | Ⅱ | ハケ目 | ナデ | にぶい橙・褐灰 | にぶい黄橙 | 長石・石英・雲母 | |
| 15 | 102 | 甕 | Q | Ⅱ | ナデ，ハケ目 | ナデ，ハケ目 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 角閃石・長石・石英 | |
| | 103 | 甕 | A | Ⅱ | ハケ目 | ハケ目 | にぶい黄橙 | 灰黄褐・褐灰 | 角閃石・長石・石英 | |
| | 104 | 甕 | A | Ⅱ | ナデ，ハケ目 | ナデ，ケズリ | にぶい橙 | にぶい橙 | 角閃石・長石・石英 | |
| | 105 | 甕 | A | | ナデ | ナデ，ケズリ | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 角閃石・長石・石英 | |
| | 106 | 甕 | B１ | I | ナデ | ケズリ | にぶい橙 | にぶい橙 | 角閃石・長石・石英 | |
| | 107 | 埦 | 表採 | | 研磨 | 研磨 | 浅黄 | 浅黄 | 長石 | |
| | 108 | 坏 | R | Ⅱ | 回転ナデ | 回転ナデ | 灰 | 灰白 | | |
| | 109 | 坏 | | Ⅱ | 回転ナデ | 回転ナデ | 灰白・灰 | オリーブ灰 | | |
| | 110 | 坏 | N | Ⅱ | 回転ナデ | 回転ナデ | 灰オリーブ | 灰オリーブ | | |
| | 111 | 坏 | P | Ⅱ | 回転ナデ | 回転ナデ | 灰オリーブ | 灰オリーブ | | |
| | 112 | 壷 | | Ⅱ | 回転ナデ・波状文 | 回転ナデ | 灰 | 灰 | 石英 | |
| | 113 | 小皿 | 表採 | | 回転ナデ | 回転ナデ | 橙・にぶい黄褐 | 橙 | 長石・石英 | 回転糸切り |
| | 114 | 擂鉢 | 表採 | | 回転ナデ | 回転ナデ・クシ目 | 灰黄 | 灰 | 石英 | |
| | 115 | 擂鉢 | 表採 | | 回転ナデ | 回転ナデ・クシ目 | にぶい黄 | 黄褐 | 長石・石英 | |
| | 116 | 碗 | | Ⅱ | 波状文 | 円圏文 | 灰白・青灰 | 灰白 | | 青花 |
| | 117 | 碗 | N | Ⅱ | 連弁文 | 草花文 | 明緑灰 | 明オリーブ灰 | | 青磁 |
| | 118 | 碗 | | Ⅱ | 連弁文 | 捻花文・花文 | オリーブ灰 | 明緑灰 | | 青磁 |
| | 119 | 土馬 | | Ⅱ | ナデ | ナデ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 赤色粒子 | |

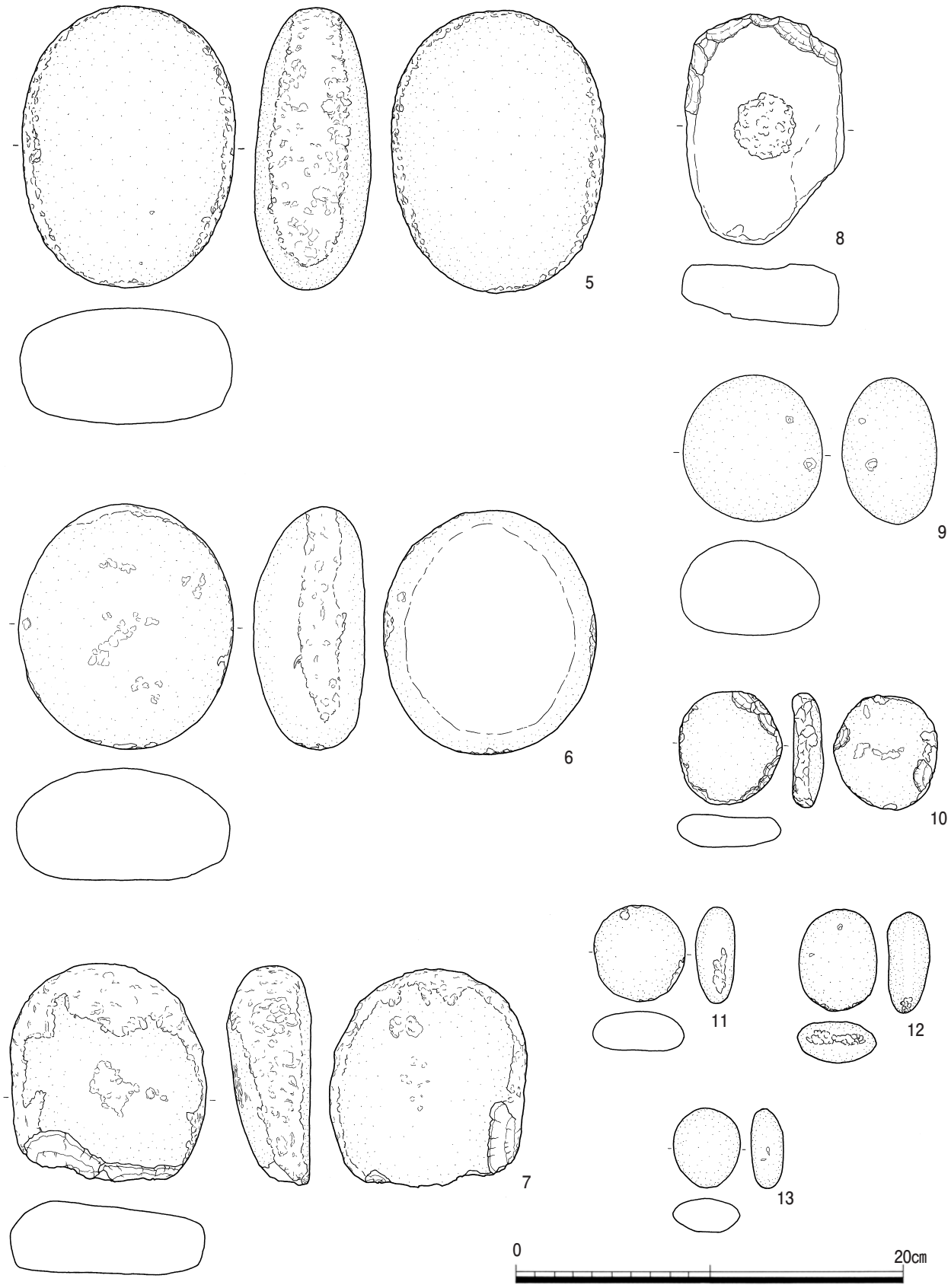
### ⑵　石器（第16図～第22図）

1 は安山岩亜角礫の台石である。片面に打撃によるものと考えられる剥落が多数認められる。2～4 は砂岩製の砥石である。いずれも片方の面に滑面を有する。

5～13は磨石・叩石の類である。8 は安山岩を，13は頁岩を，ほかは砂岩を素材とする。5・6 は表裏両面に滑面を有し，周囲には潰痕が認められる。7 は両面ともに平坦な滑面をもち，中央付近には潰痕も認められる。周囲には潰痕がめぐり，下部には打撃使用によるものとみられる破損が認められる。8 は扁平な亜角礫を素材としており，周囲に使用時の打撃によるものと考えられる破損がある。また，中央部には潰痕による凹部を形成する。9 は粗い砂岩製の磨石である。10～12は小振りの叩石である。周縁に使用痕が認められる。13は小型の磨石である。




第16図　出土石器①（S＝1/4）

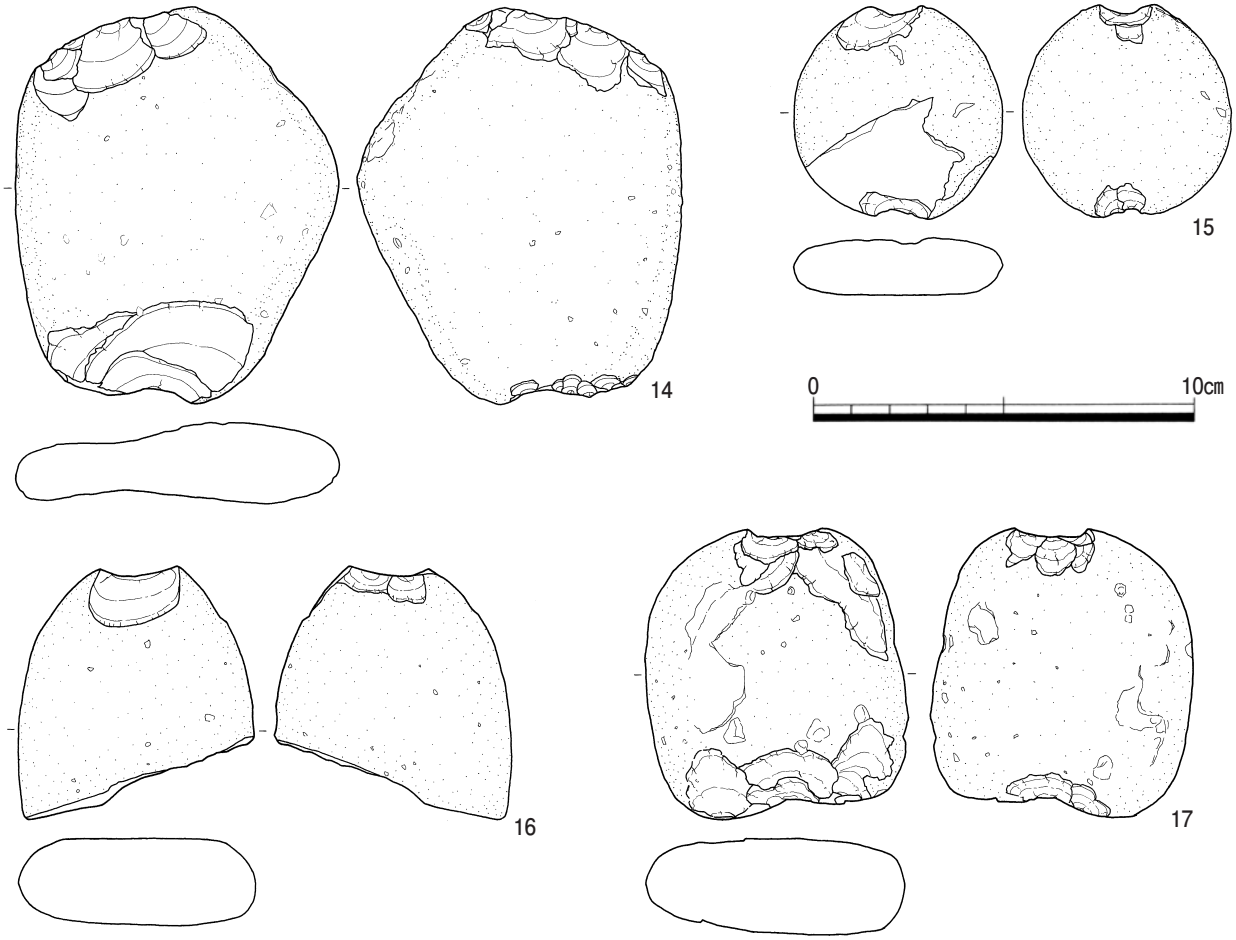



第17図　出土石器②（S＝1/3）

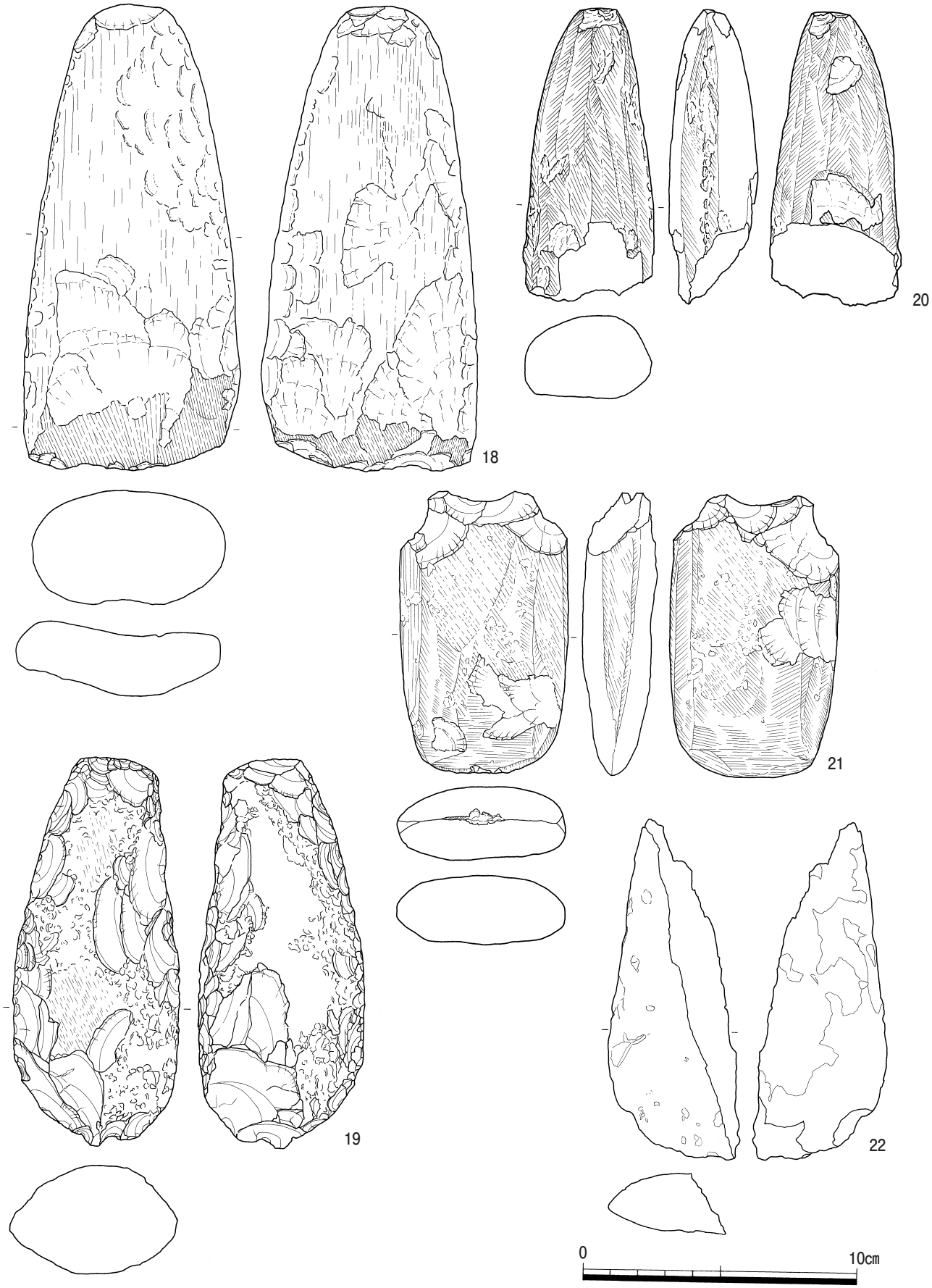
14〜17は石錘である。14・15・17は水磨礫の両端に簡易な剥離加工を施し，紐掛けの凹部を作り出している。16も一部欠損するが同様であろう。14・16は安山岩を，15・17は砂岩を素材とする。

18〜22は磨製石斧である。18・22は蛇紋岩製，19〜21は頁岩製である。18・19は刃部の再生を試みた資料である。18は破損した刃部に再加工を行い，その後研磨を施すが，明瞭な刃部を形成するまでには至っていない。19は周縁に整形時の剥離を残している。刃部は再加工段階で十分な減厚を達成できなかったためか，研磨は行っていない。

20は基部の資料である。使用による衝撃によって刃部は欠損したものと考えられる。21は短冊形を呈する。基部に数度の剥離がみられるが、基部の打ち込みによる使用欠損か，再整形を途中で放棄したものか，どちらかであろう。22は大きく欠損するが，扁平な形状であったと考えられる。




第18図　出土石器③（S＝1/2）




第19図　出土石器④（S＝1/2）

23は15cm 大のサヌカイトを母岩とする大型の石核である。大きく自然面を残し，周縁から中心にむかって作出された複数の剥離面によって平坦面を形成している。24・25は漆黒色黒曜石の石核である。24は打面を固定せず多方向へ剥離作業を行っている。表裏面，両側面には部分的に自然面をとどめており，扁平な角礫が素材であったことがうかがわれる。25は限界まで剥離作業を行った残核である。

26はサヌカイト製の横型石匙である。横長の剥片を素材とし，打点付近につまみ部を作出する。また，両面からの細かい調整剥離によって整形と刃部の形成を行っている。

27は玄武岩製のスクレイパーである。やや弧状をなすように作出された刃部には摩滅が認められる。28は玄武岩製の石錐である。剥片を折断して得られた逆三角形の素材に対して，両側辺に調整剥離を加えて錐部を作出する。29はサヌカイトの剥片である。両面に大きく自然面を残しており，剥片末端部には使用によるものの可能性がある細かい剥離が不規則に並ぶ。

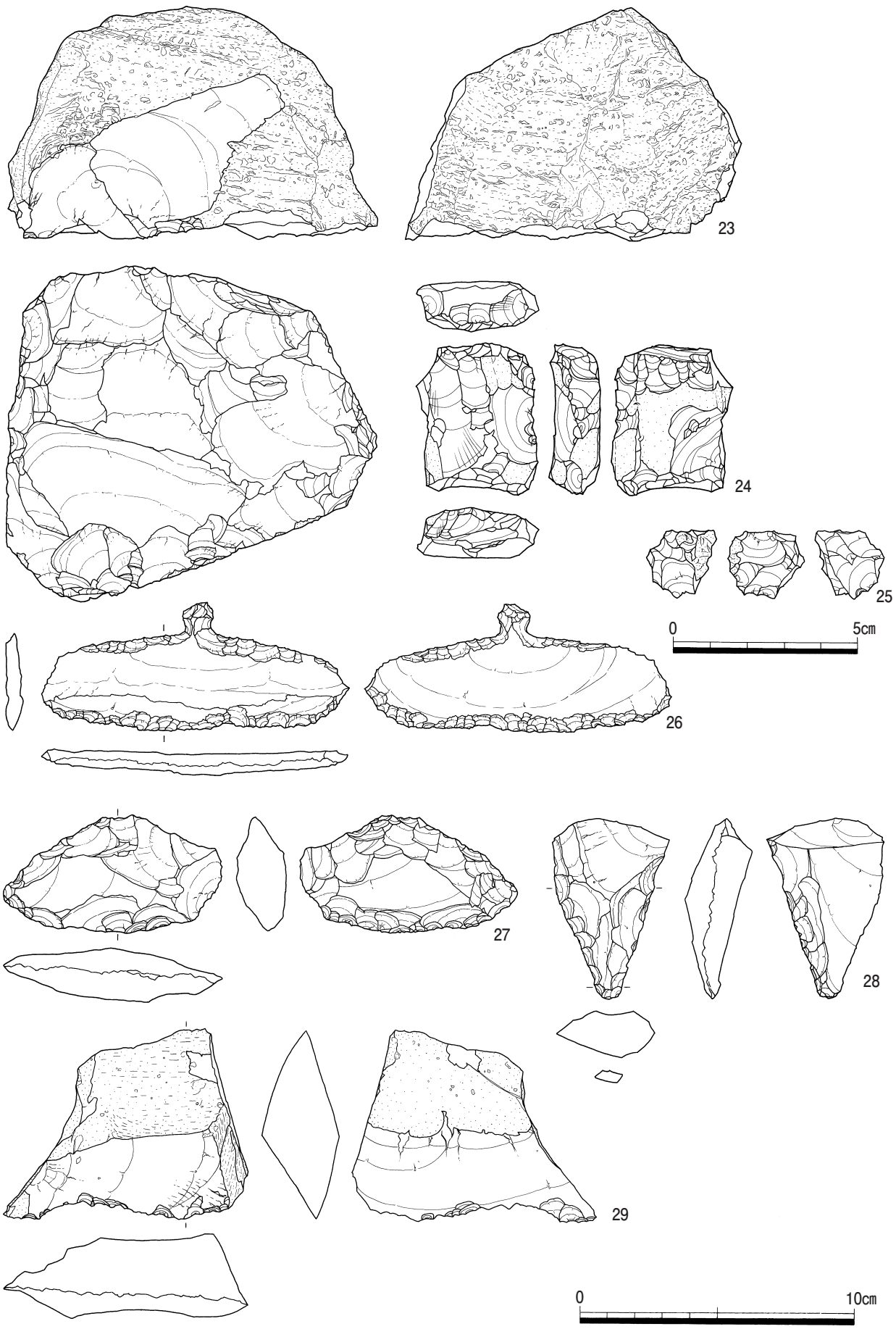
30～32は打製石斧である。30・31は短冊型をなし，30は刃部を，31は基部を欠損する。32は板状の安山岩を素材として周縁に整形剥離を加えるが，表裏面ともに大きく素材の自然面を残す。刃部は欠損する。

33は砂岩製の円盤状石器である。片面には滑面が認められることから砥石などからの剥落素材を再利用した可能性がある。

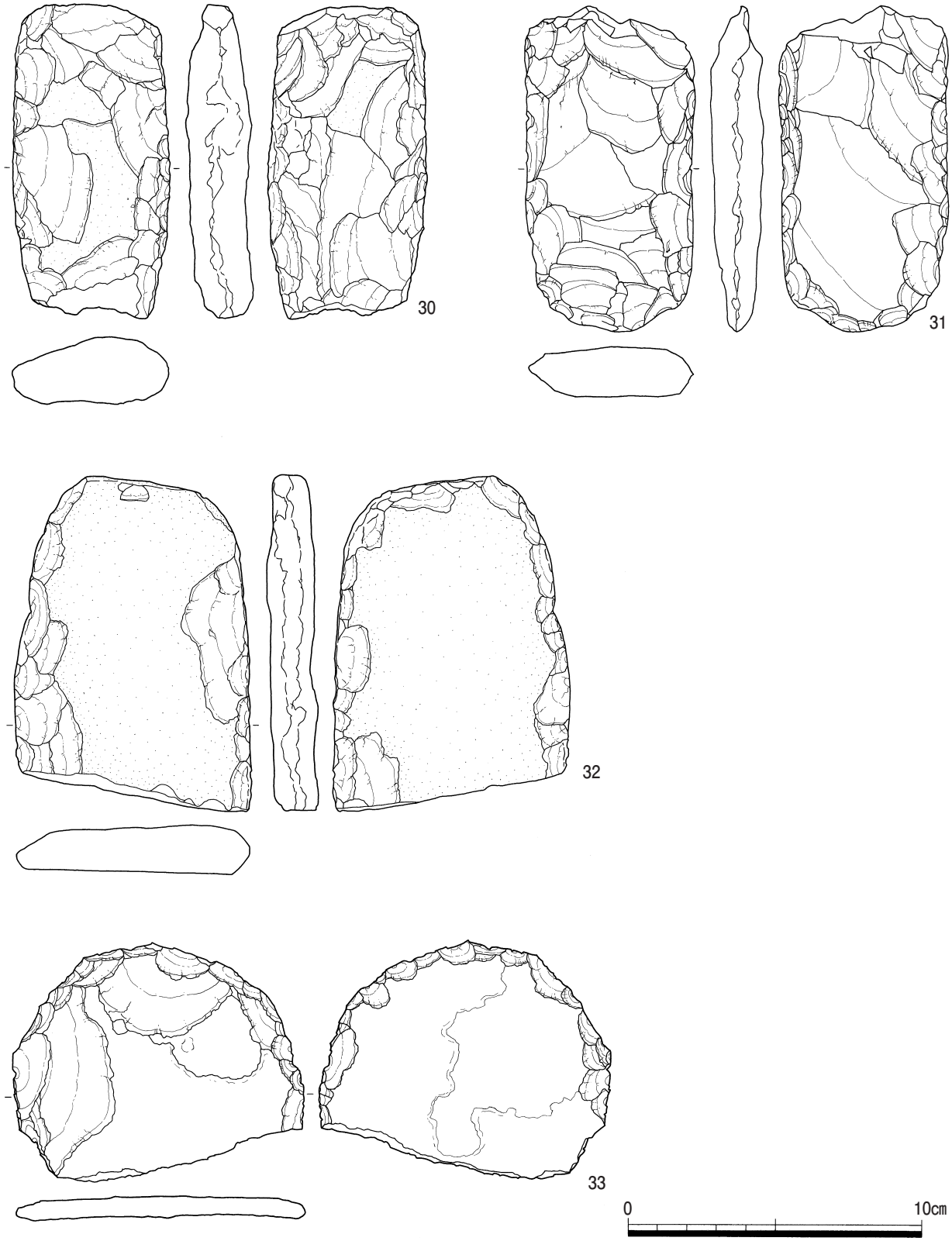
34・35は打製石包丁とした。34は縦長の安山岩剥片を素材としており，両側辺に調整剥離が認められる。片面に大きく自然面を残す。35は頁岩製で，一辺に連続的な剥離加工が認められる。片面には研磨部分が所々残ることから，おそらく磨製石斧の破損部分を再利用したものであろう。

36～50は石鏃である。36～42は平基のもの，43・44は基部が弧状にやや湾入するもの，45～48は凹基のものである。41は片面に研磨を施す。49は一応石鏃に含めたが，幅に対して長さが短く特異である。また，50は先端及び基部を欠くが，全体に研磨を掛けて薄く仕上げた磨製石鏃である。36～41は漆黒色黒曜石製，45は灰色黒曜石製，42～44・48は玄武岩製，49はサヌカイト製，50は頁岩製である。

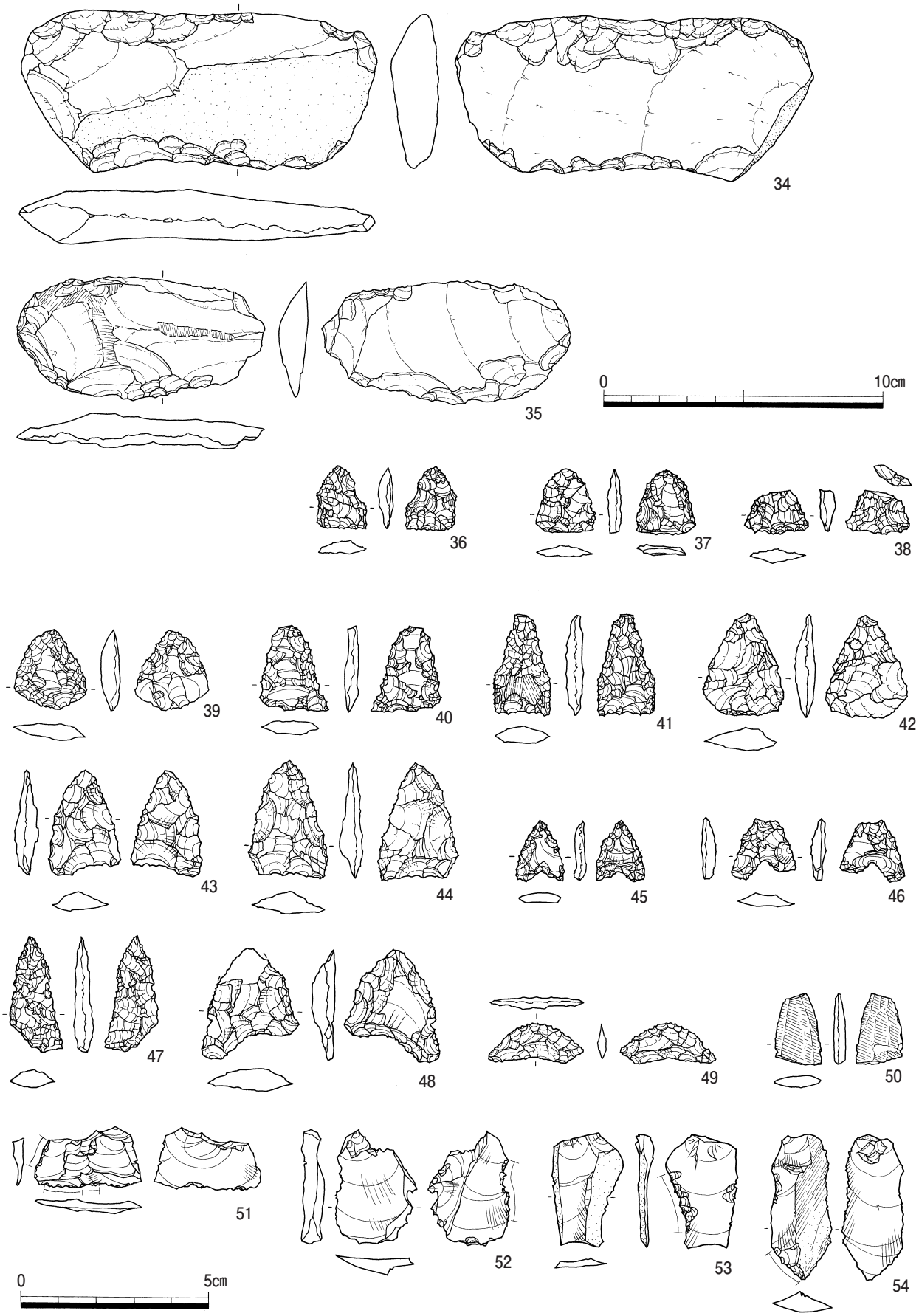
51～54は連続する微細剥離をもつ剥片である。いずれも不純物の少ない良質の漆黒色黒曜石である。51は横広の剥片を素材として打点付近は切断除去している。片方の側辺に主要剥離面側からの微細剥離が入る。52は自然面を打面として作出した剥片素材で，片方の側辺に表面からの微細剥離が連続する。53は縦長の剥片で，自然面を打面とする。表面には主要剥離面と方向を一にする縦長の剥離面が認められ，その両側には自然面が認められる。主要剥離面左側辺に連続的な微細剥離が認められる。54は自然面を打面とする縦長剥片で，表面にも大きく自然面を残す。側辺の一部に微細な剥離が認められる。また，末端部には急角度の連続剥離が認められ，二次加工の可能性もある。




第20図　出土石器⑤（24～26：S＝2/3，23・27～29：S＝1/2）




第21図　出土石器⑥（S＝1/2）




第22図　出土石器⑦（34・35：S＝1/2，36～54：S＝2/3）

## 第５表　包含層ほか出土の遺物（石器）観察表

| 図 | 番号 | 器種 | 石材 | 区画 | 層位 | 長さ（cm） | 幅（cm） | 厚さ（cm） | 重量（g） | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 16 | 1 | 台石 | 安山岩 | 表採 | | 31.1 | 21.3 | 9.2 | 10701.4 | |
| | 2 | 砥石 | 砂岩 | 表採 | | 33.0 | 13.9 | 7.3 | 4825.5 | |
| | 3 | 砥石 | 砂岩 | 表採 | | 24.3 | 11.9 | 9.0 | 3906.4 | |
| | 4 | 砥石 | 砂岩 | Ⅰ | Ⅱ | 11.6 | 11.0 | 5.1 | 1082.0 | |
| 17 | 5 | 磨石・叩石 | 砂岩 | O | Ⅲ | 14.5 | 11.0 | 6.0 | 1523.1 | |
| | 6 | 磨石・叩石 | 砂岩 | | Ⅱ | 12.7 | 11.1 | 5.7 | 1124.0 | |
| | 7 | 磨石・叩石 | 砂岩 | R | Ⅲ | 11.3 | 10.1 | 4.4 | 712.0 | |
| | 8 | 叩石 | 安山岩 | 表採 | | 11.9 | 8.3 | 3.1 | 504.0 | |
| | 9 | 磨石 | 砂岩 | 表採 | | 7.6 | 7.1 | 4.9 | 319.1 | |
| | 10 | 叩石 | 砂岩 | | Ⅱ | 4.9 | 5.3 | 1.7 | 77.0 | |
| | 11 | 叩石 | 砂岩 | P | Ⅲ | 5.0 | 4.7 | 2.1 | 62.8 | |
| | 12 | 叩石 | 砂岩 | | Ⅱ | 5.3 | 4.1 | 2.2 | 68.0 | |
| | 13 | 磨石 | 頁岩 | K | Ⅱ | 4.1 | 3.4 | 1.7 | 34.4 | |
| 18 | 14 | 石錘 | 安山岩 | 表採 | | 10.4 | 8.5 | 2.1 | 193.8 | |
| | 15 | 石錘 | 砂岩 | 表採 | | 5.6 | 5.5 | 1.5 | 69.4 | |
| | 16 | 石錘 | 安山岩 | R | Ⅱ | 6.8 | 5.2 | 2.3 | 130.0 | |
| | 17 | 石錘 | 砂岩 | | Ⅲ | 7.7 | 7.0 | 2.6 | 192.4 | |
| 19 | 18 | 磨製石斧 | 蛇紋岩 | | Ⅲ | 17.0 | 7.9 | 4.3 | 762.8 | |
| | 19 | 磨製石斧 | 頁岩 | 表採 | | 14.0 | 6.0 | 3.9 | 419.4 | |
| | 20 | 磨製石斧 | 頁岩 | A | Ⅱ | 10.7 | 4.8 | 3.2 | 196.7 | |
| | 21 | 磨製石斧 | 頁岩 | | Ⅱ | 10.3 | 6.1 | 2.7 | 232.6 | |
| | 22 | 磨製石斧 | 蛇紋岩 | R | Ⅲ | 12.4 | 4.8 | 2.2 | 111.2 | |
| 20 | 23 | 石核 | サヌカイト | N | Ⅱ | 12.2 | 13.4 | 8.4 | 1532.5 | |
| | 24 | 石核 | 黒曜石 | N | Ⅱ | 4.2 | 3.8 | 1.4 | 6.6 | |
| | 25 | 石核 | 黒曜石 | Q | Ⅱ | 1.9 | 2.1 | 1.9 | 24.2 | |
| | 26 | 石匙 | サヌカイト | A | Ⅱ | 8.3 | 3.5 | 0.7 | 13.4 | |
| | 27 | スクレイパー | 玄武岩 | 表採 | | 7.9 | 4.8 | 2.0 | 53.9 | |
| | 28 | 石錐 | 玄武岩 | 表採 | | 6.6 | 4.3 | 2.4 | 40.2 | |
| | 29 | 剥片 | サヌカイト | | Ⅱ | 7.0 | 8.9 | 3.1 | 134.5 | |
| 21 | 30 | 打製石斧 | 安山岩 | 表採 | | 10.7 | 5.3 | 2.3 | 193.5 | |
| | 31 | 打製石斧 | 頁岩 | 表採 | | 11.1 | 5.7 | 1.8 | 161.9 | |
| | 32 | 打製石斧 | 安山岩 | 表採 | | 11.3 | 8.1 | 1.7 | 269.5 | |
| | 33 | 円盤状石器 | 砂岩 | K | Ⅱ | 8.1 | 9.9 | 0.8 | 101.2 | |
| 22 | 34 | 打製石包丁 | 安山岩 | | Ⅱ | 12.7 | 5.8 | 2.0 | 168.2 | |
| | 35 | 打製石包丁 | 頁岩 | P | Ⅱ | 8.9 | 4.4 | 1.2 | 52.3 | |
| | 36 | 石鏃 | 黒曜石 | | Ⅱ | 1.7 | 1.4 | 0.5 | 0.9 | |
| | 37 | 石鏃 | 黒曜石 | | Ⅱ | 1.8 | 1.6 | 0.4 | 0.9 | |
| | 38 | 石鏃 | 黒曜石 | | Ⅰ | 1.2 | 1.7 | 0.4 | 1.5 | |
| | 39 | 石鏃未製品 | 黒曜石 | | Ⅲ | 2.2 | 2.0 | 0.5 | 2.5 | |
| | 40 | 石鏃 | 黒曜石 | Ⅰ | Ⅱ | 2.4 | 1.8 | 0.4 | 1.5 | |
| | 41 | 石鏃 | 黒曜石 | | Ⅲ | 2.7 | 1.5 | 0.5 | 2.0 | 部分磨製 |
| | 42 | 石鏃 | 玄武岩 | L | Ⅲ | 2.8 | 2.2 | 0.6 | 2.5 | |
| | 43 | 石鏃 | 玄武岩 | Ⅰ | Ⅱ | 2.9 | 2.0 | 0.7 | 2.7 | |
| | 44 | 石鏃 | 玄武岩 | Ⅰ | Ⅲ | 3.2 | 2.1 | 0.7 | 2.9 | |
| | 45 | 石鏃 | 黒曜石 | | Ⅲ | 1.6 | 1.3 | 0.3 | 0.5 | |
| | 46 | 石鏃 | 黒曜石 | K | Ⅱ | 1.7 | 1.7 | 0.4 | 0.8 | |
| | 47 | 石鏃 | 黒曜石 | | Ⅱ | 3.1 | 1.4 | 0.5 | 1.7 | |
| | 48 | 石鏃 | 玄武岩 | | Ⅱ | 3.0 | 2.6 | 0.6 | 3.4 | |
| | 49 | 石鏃 | サヌカイト | C | Ⅲ | 1.1 | 2.6 | 0.3 | 0.6 | |
| | 50 | 石鏃 | 頁岩 | | Ⅲ | 1.9 | 1.3 | 0.3 | 0.8 | 磨製 |
| | 51 | 微細剥離剥片 | 黒曜石 | P | Ⅲ | 1.7 | 2.9 | 0.4 | 1.4 | |
| | 52 | 微細剥離剥片 | 黒曜石 | 表採 | | 3.1 | 2.2 | 0.6 | 3.0 | |
| | 53 | 微細剥離剥片 | 黒曜石 | M | Ⅱ | 3.1 | 1.9 | 0.5 | 2.0 | |
| | 54 | 微細剥離剥片 | 黒曜石 | 表採 | | 3.9 | 1.6 | 0.6 | 3.0 | |

## 第５節　まとめ

宮野遺跡は，雲仙山系を中心に有明海に向かって延びる丘陵の先端部に立地している。周囲の谷底との比高差は15～20m ほどである。

今回，大苑地区県営畑地帯総合整備事業に伴い，道路及び切り土計画部分の約1,000㎡の本調査を実施した。過去の試掘調査ではⅣ層以下，Ⅷ層までの層位を確認したが，遺構，遺物は確認されていないため，本調査では調査区全体をⅣ層上面までは掘り下げていない。

今回の調査では，縄文時代後期～突帯文期，弥生時代中期・後期，古墳時代，古代，中世，近世の遺物が出土した。Ⅲ層上面でピットや溝，数箇所の焼土跡を確認したが，遺構内出土遺物が少なく時期の判断は困難である。ピットの配置を検討したが，掘立柱建物跡と考えられる遺構を推測することはできなかった。６条の溝は，調査区を縦断，横断するように遺跡東側（北東・南東）の谷へ傾斜している。切り合い関係が確認できた溝もあり，溝内の出土遺物から近世の遺構と考えられるが，性格等は不明である。

遺構内出土遺物が少なく，時期の検討は困難であったが，包含層から縄文時代後期～突帯文期，弥生時代中・後期の土器が多く出土している。今後，周辺遺跡との比較検討を行いたい。

# 図　　版

遺跡上空から雲仙方面を望む（南から）

航空写真①

調査区合成写真（俯瞰）

航空写真②

平成17年度前期調査区（北西から）

平成17年度後期調査区（北西から）

航空写真③

図版 4

平成16年度調査風景（南から）

平成16年度完掘状況（南から）

平成17年度前期調査表土剥ぎ（東から）

平成17年度後期調査表土剥ぎ（西から）

北東壁土層（南西から）

北東壁土層（西から）

南東壁土層（北西から）

南東壁土層（北から）

調査風景・土層

平成17年度前期調査風景（西から）

平成17年度後期調査風景（南西から）

溝 1 （北東から）

溝 2 （北東から）

溝 1 （南西から）

溝 2 （南西から）

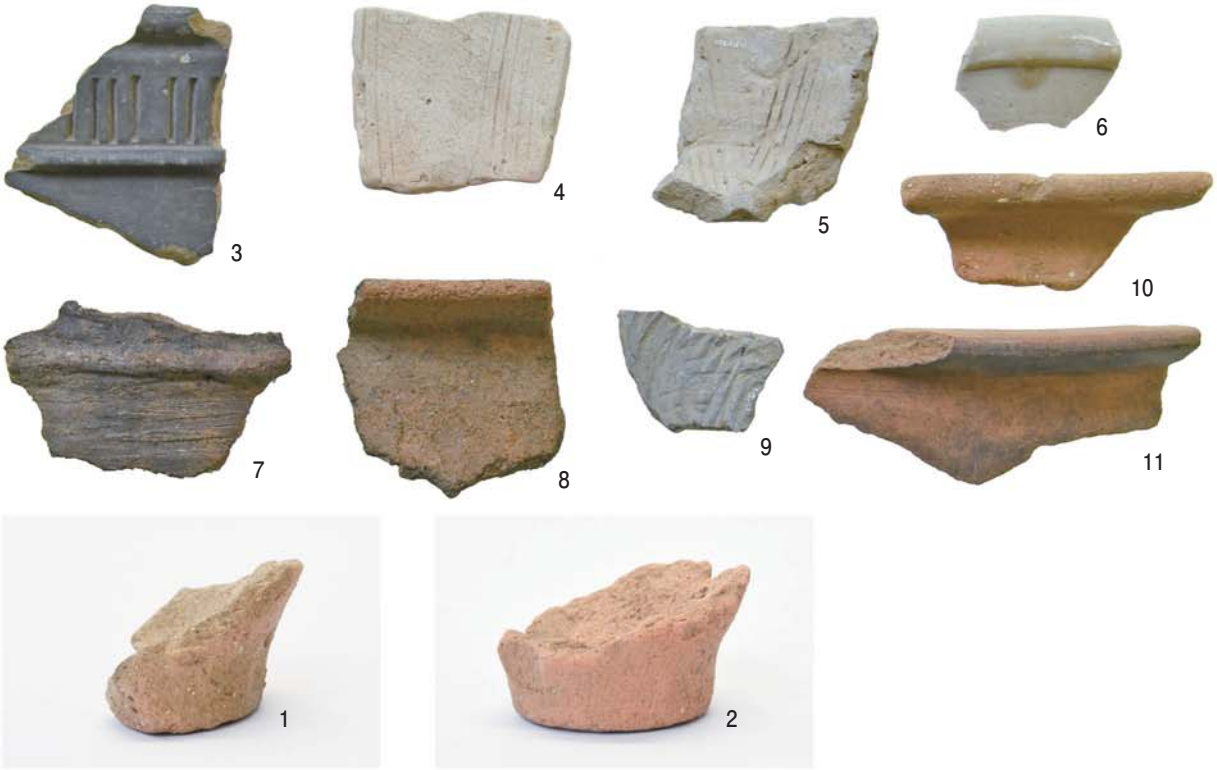
溝 5 ・溝 3 （北西から）

溝 2 （南西から）

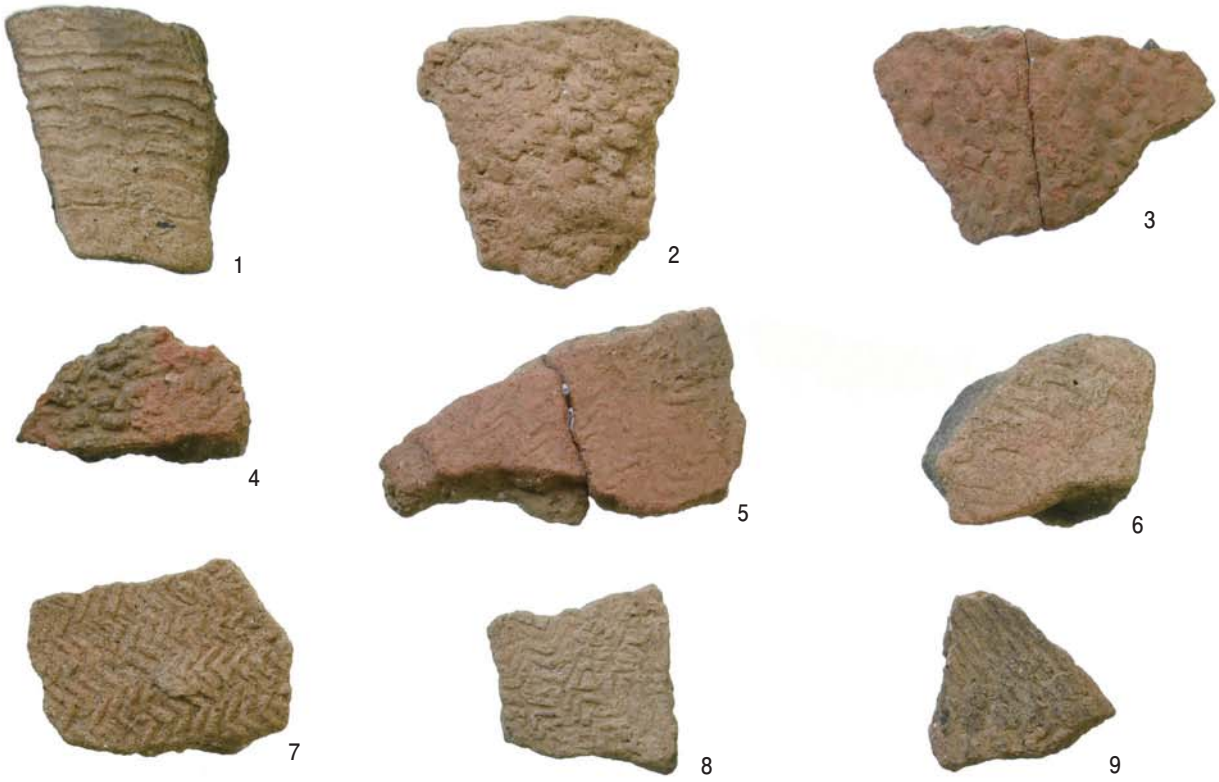
調査風景・溝

図版 6

遺物出土状況

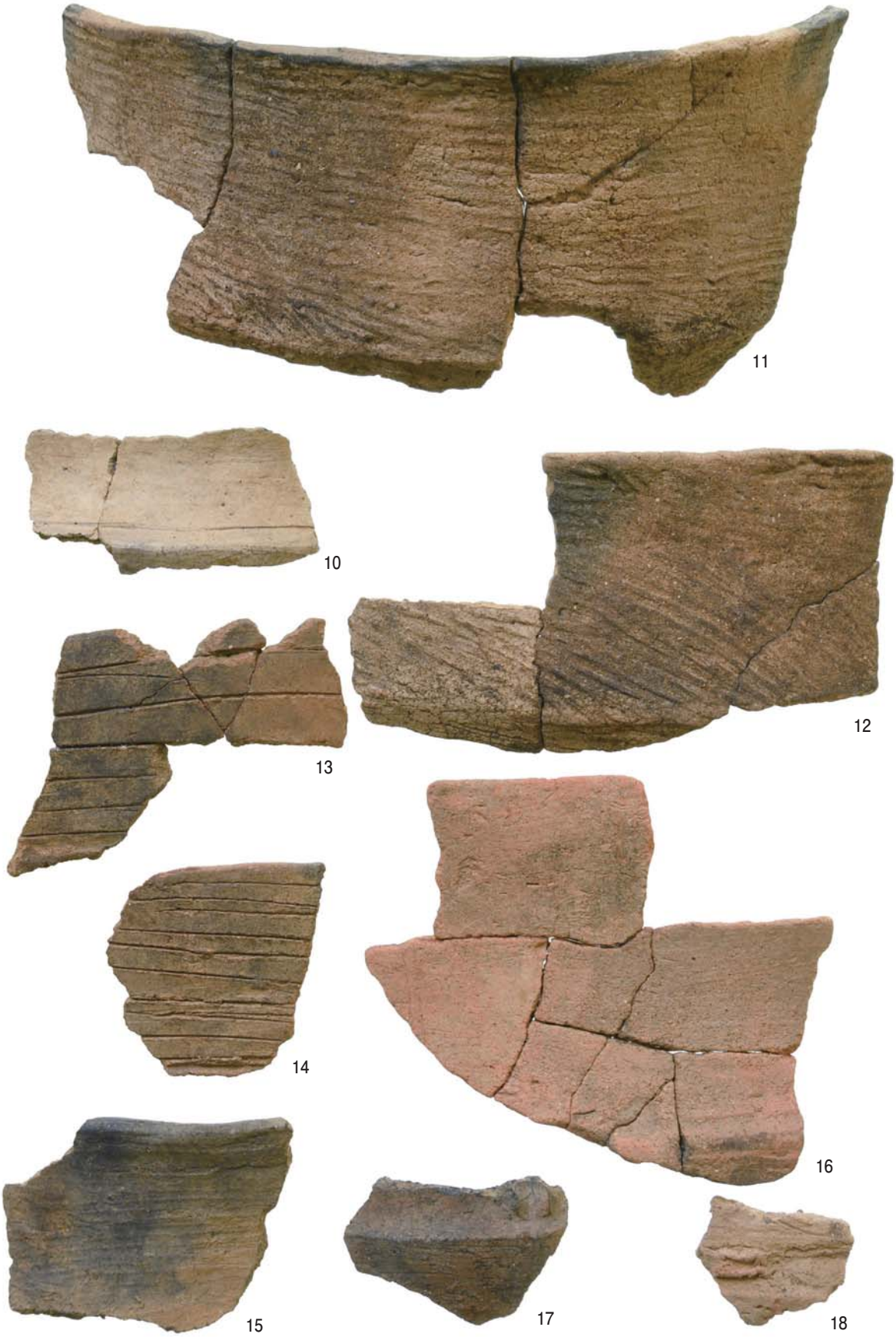



溝内出土の遺物




包含層ほか出土の遺物（土器）①

図版 8




包含層ほか出土の遺物（土器）②

包含層ほか出土の遺物（土器）③

包含層ほか出土の遺物（土器）④

56

57

58

96

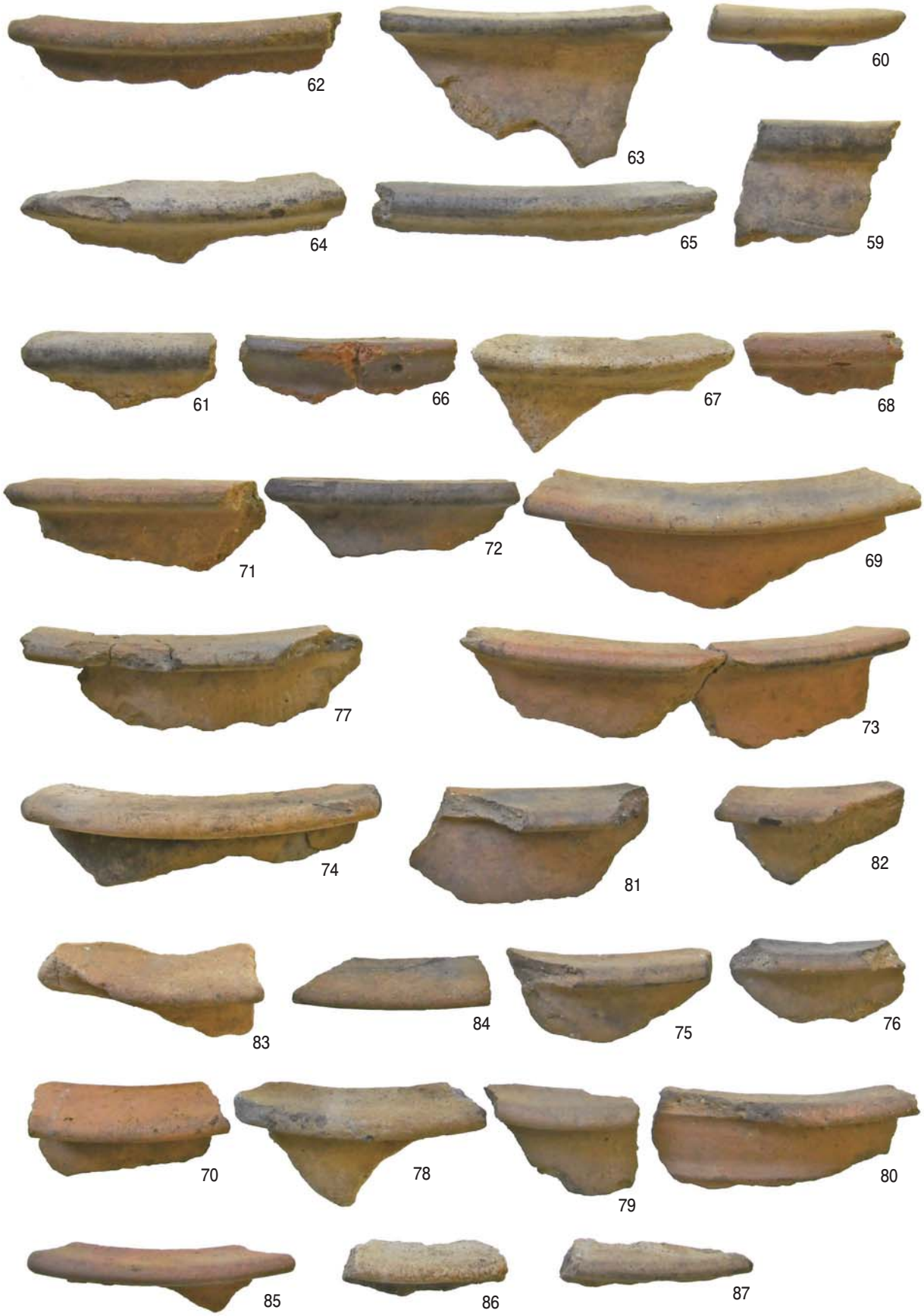
98

99

100

101

包含層ほか出土の遺物（土器）⑤




包含層ほか出土の遺物（土器）⑥

包含層ほか出土の遺物（土器）⑦

図版14

包含層ほか出土の遺物（土器・陶磁器類）

包含層ほか出土の遺物（石器）①

5

6

7

8

9

10

11

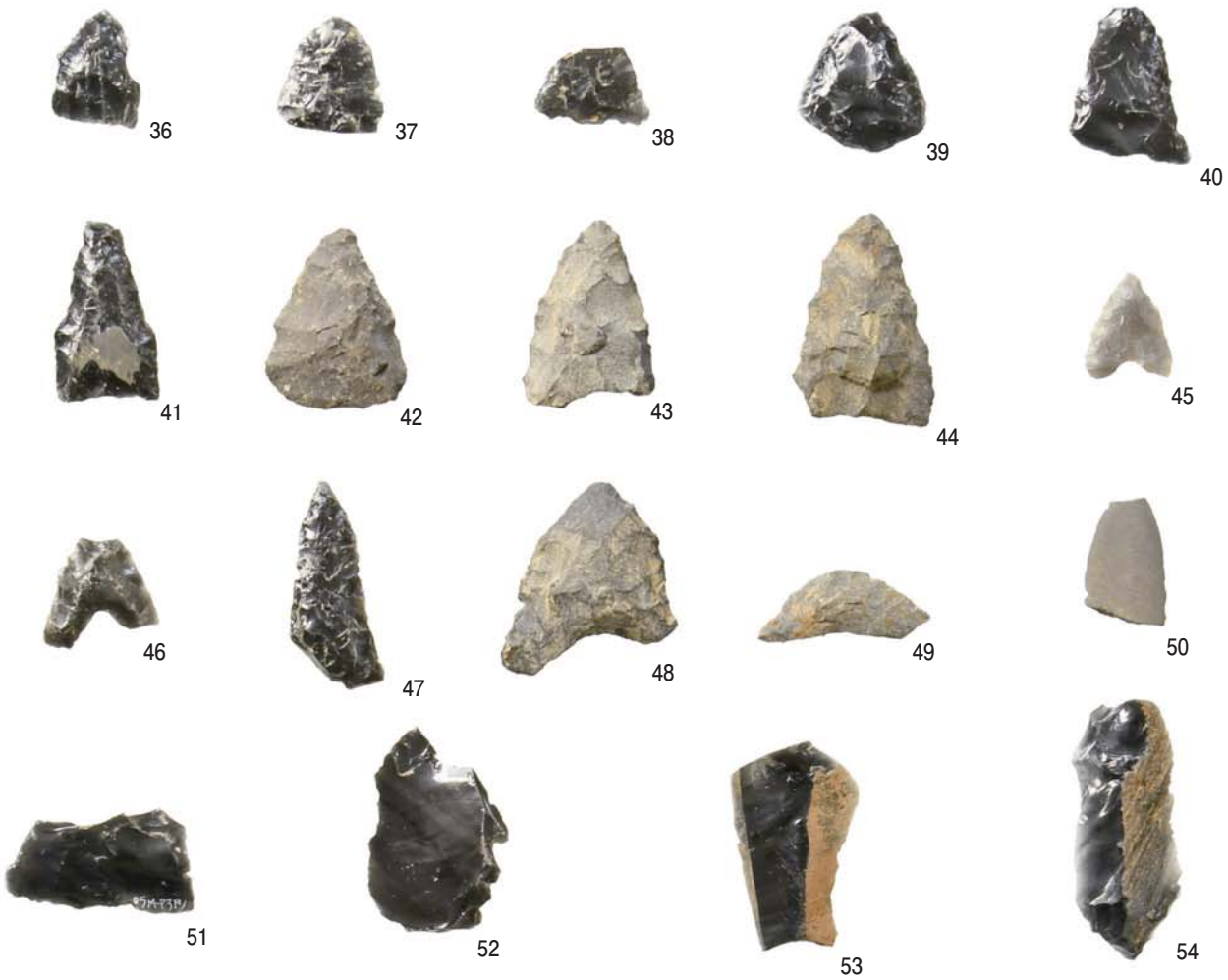
12

13

包含層ほか出土の遺物（石器）②

包含層ほか出土の遺物（石器）③

図版18




包含層ほか出土の遺物（石器）④

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | みやのいせき |
| 書名 | 宮野遺跡 |
| 副書名 | 大苑地区県営畑地帯総合整備事業（担い手育成型）に伴う発掘調査 |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 南島原市文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第13集 |
| 編著者名 | 荒木　伸也・本多　和典 |
| 編集機関 | 南島原市教育委員会 |
| 所在地 | 〒859-2412　長崎県南島原市南有馬町乙1023番地　TEL0957-73-6705 |
| 発行年月日 | 西暦2018年９月30日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | ° ′ ″ | ° ′ ″ | | | |
| みやのいせき<br>宮野遺跡 | みなみしまばらし<br>南島原市<br>ありえちょう<br>有家町 | 42214 | 109 | 32°<br>40′<br>41″ | 130°<br>20′<br>18″ | 20040906<br>～<br>20041007<br><br>20050802<br>～<br>20050923 | 160㎡<br><br>905㎡ | 農業基盤<br>整備事業 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 宮野遺跡 | 遺物包含地 | 縄文時代<br>弥生時代<br>古墳時代<br>古代<br>中世<br>近世 | ピット<br>溝 | 土器<br>石器<br>陶磁器 | |

南島原市文化財調査報告書　第13集

宮　野　遺　跡

2018. 9. 30

発行　長崎県南島原市教育委員会
〒859-2412　長崎県南島原市南有馬町乙1023番地

印刷　株式会社 昭 和 堂

南島原市文化財調査報告書　第13集

# 宮野遺跡

2018

長崎県南島原市教育委員会